

老子八十一化圖說について

——その資料問題を中心として——

窪 徳 忠

一、はしがき

二、原文の對照

三、福井說について

四、吉岡說について

五、むすび

一、は し が き

私は、さきに本紀要の第四六冊に、「老子八十一化圖說について——陳致虛本の存在をめぐる——」と題する小論を發表した。本稿は、その小論とのあいだにいささか時間的間隔があきすぎる嫌らいがあるけれども、實はその續編、前稿を第一部とすれば第二部に相當する。私がこのような關係に手をつけるようになった理由、もしくは目的な

老子八十一化圖說について

どについては、すでに前稿の「はしがき」のなかでふれておいたから、前稿の續編もしくは第二部に相當する本稿では、形式的にも實質的にも、「はしがき」のようなものはほとんど必要がないということができ得るであらう。そこで、はじめ本稿では「はしがき」などはふいて、すぐに本文の記述にかかろうかと考えてみた。けれども、前稿との間隔が少々あきすぎている上に、それでは讀者諸賢に對していささか不親切なように思われたので、あえて重複をいわず、簡單ながら問題の所在だけを指摘して、「はしがき」にかえることにした。その點、あらかじめ大方のお許しをえておきたいと思う。

さて、一三世紀のなかばごろ、元——正確にいえば Mongol ——の憲宗 Mongke の時代に、佛教と道教とのあいだで、具體的にいえば、當時はまだ皇帝になつていない Khubilai の前で、ラマ僧をふくむ佛教の僧侶と全眞教の道士たちとが、儒家を「證義」すなわち議論の可否判定者として、かなり規模の大きな論争を行なつたといわれている⁽¹⁾。この論争がいわゆる元代の佛道論争であるが、そのきっかけや経緯、顛末などについて、もっともくわしく傳えている現存の文獻資料、いわば唯一の根本資料と一般に信ぜられているのが、釋祥邁の撰といわれている至元辯僞錄である⁽²⁾。撰者の釋祥邁は、同書卷四の末尾に附載された「對道士持論師德一十七名」の項によれば、實際にこの論争に参加した僧侶のひとりとされている。それにもかかわらず、本文のなかには論争に参加したとは思われない記述や、前後矛盾する内容などが目につく。従つて、私からみると、至元辯僞錄は、ひとりの人間の手になつた著作とは認められない上に、到底元代の佛道論争に關する根本資料とはなしえない、信憑性に乏しい文獻といわなければならぬのである⁽³⁾。けれども、まことに残念なことには、いままでのところ、本書に代る信憑性のたかい文獻資料が見いだせないで、不本意ながら一應至元辯僞錄によつて、元代の佛道論争のきっかけや經過を窺う以外に方法がないのである。

もし、本書に代るすぐれた文獻資料の存在を御承知の方があつたら、ぜひ御示教をえたいと思う。

至元辯僞錄の卷三と卷四の記述に従うと、論争のきつかけになったのは、丘長春の高弟で、一三世紀のなかばごろ全眞教團の教主的立場にあつた李志常が、令狐璋と史志經という二人の全眞道士に命じて、太上混元上德皇帝明威化胡成佛經と題する化胡經の一種と、老子八十一化圖と稱する圖說書とを僞作させ、ひろく一般に流布させようとたくらんだことであつた。老子八十一化圖とは、老子の化現轉生の説や化胡の種々相などを八一葉の圖にまとめ、各圖ごとに若干の説明文を附した圖說である。ふとした機會に、これら兩書の僞作と全眞教側のたくらみとを知つた佛教側が、ラマ教系の人をしてその旨を憲宗に提訴させたために、前後二回にわたつて——一回は憲宗の前で、一回は Khubilai の前で——兩者のあいだで論争が行なわれた。ことに第二回目には、道教側は佛教側がつぎつぎに放つてくる質問の矢になにひとつ満足に答えることができず、つねに問いつめられ、抗辯するいとまもないままに佛教側に論破されて、みるも無慘にやぶれさつた。その結果、論争のきつかけとなつた兩書は、憲宗の八年（一二五八）、命をうけた僧侶の手によつて、燕京の大憫忠寺正殿の西南にあたる場所で板木ともども焼却され、詔によつてその流布が禁止されるとともに、論争した一七名の道士たちが一時剃髪した。

以上が、至元辯僞錄に記載されている元代の佛道論争のごくあらましの紹介である。その記載についても首肯しがたい點や誤りが多いけれども、當面の問題とはややかけ離れすぎるので、ここではその指摘ははぶく。

至元辯僞錄によれば、佛道論争のきつかけとなつた老子八十一化圖は、戊午の年すなわち憲宗の八年の七月一日と、世祖 Khubilai の至元一八年（一二八二）一〇月二〇日の、前後二回にわたつて、板木ともども焼却され、詔によつてその流布もかたく禁ぜられたということである。ところが、まことにふしぎなことには、名も同じく老子八十一

化圖説と題する圖説書が、堂々と現存しているのである。現存本には、福井康順——以下福井本とよぶ——、吉岡義豊——以下吉岡本とよぶ——および大淵忍爾——以下大淵本とよぶ——三博士藏の三種類がある。前二者については、すでに吉岡義豊博士がその著「佛教と道教第一」のなかで目次と本文の一部の寫眞をしかかけて紹介し、私は別の面から吉岡博士の言及していない點および大淵本について前稿でふれておいたから、ここではその説明は省略する。

三種類の現存本は、書名や體裁は異なっているけれども、圖とその説明文の内容とは酷似している。吉岡博士は、福井・吉岡兩本の酷似を根據に、兩本は同一原本にもとづくと考え、至元辯僞錄所引の老子八十一化圖の文章や猶龍傳の相當個所と現存本とを比較した結果、福井・吉岡兩本の圖の構圖の酷似、明の太祖の御製序と陳致虛の序との存在、現存本の卷首にかかげられた三二人の眞人圖の性格などを論據として、明代洪武年間の編集本と陳致虛の「修治本」なるものの存在とを想到した。そうして、福井・吉岡兩本の原本は、陳致虛の「修治本」、その原本は洪武編集本であり、それはすなわち原本老子八十一化圖だという流傳系統を推測し、現存本は元の佛道論争の發端となった問題の書のほぼ全貌を伝える貴重な資料で、それは結局原本太上八十一化圖にはかならないと、いとも簡単に結論づけている。いいかえれば、現存本は李志常のつくらせた原本八十一化圖の全貌を大體傳えているというわけである。

けれども、私のような臆病な人間にとっては、吉岡博士のように大膽かつ直截簡明に考えることはできない。至元一八年から今日まで、ざっと七〇〇年である。この永いあいだある一部の書物がそっくりそのままの形で傳えられることは、容易なことではない。その上、老子八十一化圖は、問題を起して板木さえも焼却され、その流布が嚴禁されたのである。従って、そのような書物が原形をそっくりそのままとどめて、かくも永い年月にわたって傳えられるということは、私の常識では、まず考えられない。だからこそ、自他ともに道教研究の大家と許す吉岡博士の説ではあ

りながら、私にはどうしても納得がいかないのである。

吉岡博士の説のうちで、第一に問題としなければならないのは、明の洪武年間の編集本の存在と、陳致虚の「修治本」なるものの存在とを想定する点である。前者の根拠は、福井・吉岡兩本の巻首に、ともに洪武七年（一三七四）の日付のある明の太祖の御製の序がかかげられていることであり、後者の論拠は陳致虚の序と真人圖なるものとが同じくその巻首に收められていることである。しかし、これらの点だけを論拠にして、明の洪武編集本と陳致虚本の存在を想定するのはいささか腑におちず、再検討を必要とするであろう。

以上が、前稿の「はしがき」の大體の要點である。そうして、私なりに検討を加えた結果、明の太祖の御製序は、道藏所收の大明太祖高皇帝御註道德眞經の巻首にかかげられた序と、多少の文字の相違が認められるだけで、いわば同文であることが判明した。従って、太祖の序の存在は、洪武編集本の實在を示めず根拠とはなりえないことが明らかにになった。つぎの陳致虚の序は道藏所收の金丹大要卷二の冒頭にかかげられている道德經序と同一内容のものであるらしい。その内容からみると、これまた明の太祖の序と同じく、老子八十一化圖の刊行とは無關係で、單にかれが道德經解を撰したことを物語るにすぎない。吉岡博士が、陳致虚修治本の存在を主張する第三の論據である真人圖のなかには、陳致虚に無關係な道士の圖が八葉までもふくまれている上に、かれ以後の道士が六人までも畫かれているのである。いかに陳致虚がすぐれた道士であったとしても、自分の死後の道士たちの姿を、生前に修治した書物の巻首にかかげるわけにはいくまい。以上のようなことから、明の洪武編集本と陳致虚の修治本との存在を主張する吉岡博士の説は、根拠のない獨斷、實證的手續きをおこたつた早計にすぎないと、考えたのである。⁽⁵⁾

前稿において私は、現存本と原本、至元辯僞錄所引の原本と現存本などの相互關係や、原本の資料となつた書物、

吉岡博士の言をかりれば「參考資料」の問題については、まだあまり手をつくしていなかった關係から、あえてはぶいた。今日においても、なおみた範圍は狭く、考察もきわめて不十分ではあるけれども、あまりに前稿との間隔が過ぎるので、いささか不本意ながら、いままでに調べた範圍内において、私見を發表することにした。もし、お氣付の資料があつたならば、細大となく、ぜひお教えをいただきたいと思う。なお、至元辯僞錄所引の八十一化圖の原本と現存本との關係については、吉岡博士ばかりでなく、福井博士にも説がある。けれども、いづれにしても、文章の比較對照が問題なために、原文をかかげないかぎり理解が困難である。そこで、はなはだ煩わしいけれども、まず原文をかかげてから、兩博士の説に及ぼうと思う。

二、原文の對照

福井康順博士は、その著「道教の基礎的研究」のなかに、至元辯僞錄所引の老子八十一化圖と福井本との七カ條の原文の對照表をかかげ、吉岡博士は吉岡本——ただし第四化において「祁」の一字のみは福井本による——、辯僞錄所引の老子八十一化圖および猶龍傳の對照表をつくっている。そこで私も、私なりの對照表をかかげて以後の考察に資したいと思う。ただし、兩博士が上下、もしくは上中下の對照表をつくっているのに對して、私は横の表とする。というのは、縦では對照すべき文が多くて、反つて理解に不便ではないかと考えたためである。もちろん横では、對照という點では不都合きわまりなく、對照といういみをなさないかもしれないけれども、右の理由から御諒承をいただきたい。かかげた順序は、右から辯僞錄所引の老子八十一化圖の原文、現行本、および猶龍傳、その他の資料である。至元辯僞錄と現行本の條の第何化というのは、その化の條目と化題である。各條末の括弧のなかの數字は卷數を

示めす。辯とあるのは至元辯僞錄所引の老子八十一化圖、現は現行本八十一化圖説のそれぞれ畧稱である。吉岡博士は、その對照表において、猶龍傳をはじめとする出典の文を、ほとんど畧さずに記載しているが、私はあまりにも長文になることをおそれて、必要最少限度の原文をかかげるに止めた。従つてあるいは、讀解に不便な場合があるかもしれない。比較を主眼としたためなので、その點は諒とされたい。なお、化の條目のあいだは一行あけて、區別した。

○第一化云。道者萬化之父母。自然之極尊。於此幽玄微妙之中而生空洞。空洞者。眞一也。眞一之氣。化生之後。

歷九十九萬億九十九萬歲。乃化生上三氣。三氣相去。九十九萬億九十九萬歲。三合成德。共生無上。乃虛皇天尊。又歷如上歲數。乃生中三氣。三合成德。乃生玄老。卽元始天尊也、又歷如上歲數。乃生下三氣。三合成德。共生太上。卽太上道君也。自後又一氣。復生三氣。每氣相去八十一萬億八十一萬歲。三合成德。共生李老君。雖四聖相次。各不相因。謂之獨化。老君生後。乃生五運。謂太易・太初・太始・太素・太極。(辨一)

○第一化云。老子生在五運之前。(辨二)

○生於無始。起於無因。爲萬道之先。作元氣之祖。(辨一)

○第一化 起無始 太上老君。生乎(於)無始。起乎(於)無因。爲萬道之先。元氣之祖。鴻洞溪倅。於無光象聲色。

微妙之中。自然而生。(現)

○太上生乎無始。起乎無因。爲萬道之先。元炁之祖。蓋無光・無象・無色・無聲・無宗・無緒。杳杳冥冥。(中畧)

夫道。自然之妙本也。於微妙之中而生。空洞者。眞一也。眞一者、不有不無也。從此一炁而生上三炁。三合成德。共生無上也。自無上而生中三炁。三合成德。共生眞老也。自眞老而生下三炁。三合成德。共生太上也。自太上廼生前三炁。三合成德。共生老君也。自老君化成後三炁。三炁又化生眞妙玉女。(猶龍傳卷一、起無始⁷)

○太上老君者。混元皇帝也。乃生於無始。起於無因。爲萬道之先。元氣之祖也。蓋無光・無象・無音・無聲・無宗・無緒。幽幽冥冥。(中畧) 夫道者。自然之極尊也。於幽無之中而生空洞焉。空洞者眞一也。眞一者有不無也。從此一氣化生。後九十九萬億九十九萬歲。乃化生上三氣。三氣各相去九十九萬億九十九萬歲。三合成德。共生無上也。自無上生後九十九萬億九十九萬歲。乃化生中三氣。三氣各相去九十九萬億九十九萬歲。三合成德。共生無上。自玄老生後九十九萬億九十九萬歲。乃化生下三氣。三氣各相去九十九萬億九十九萬歲。三合成德。共生太上也。自太上生後復八十一萬億八十一萬歲。乃生一氣。一氣生後復八十一萬億八十一萬歲。乃生前三氣。三氣各相去八十一萬億八十一萬歲。三合成德。共生老君焉。(雲笈七籤卷一〇二所引混元皇帝聖紀)

○第一起無始者。所言老君也。老君。生於無始。起於無因。爲萬道之先。元氣之祖也。(中畧) 大道之身卽老君也。萬化之父母。自然之極尊也。(道德眞經廣聖義卷二、釋老君事跡氏族降生年代の項)

○第二化云。老子生下三氣之中。(辨二)

○第二化 顯眞身 太上老君。於太空之中。結氣凝眞。強爲之容。或示仙姿。爰及肉身。不可測度。自然周遍成象。(現)

○老君。(中畧) 於太空之中。結炁凝眞。強爲之容。(中畧) 或示仙姿。妙體。爰及肉身。(中畧) 不可測量。(猶龍傳卷一、見眞身。なお下三氣のなかに生れたことは第一化にあるので繰返えさない。)

○老君。(中畧) 昔於虛空之中。結氣凝眞。強爲之容。(中畧) 爰及肉身。(中畧) 不可測量。(雲笈七籤卷一〇二)

○第三見眞身者。老君乃無生之至精。兆形之至靈也。昔於空洞之中。結氣凝眞。強爲之容(道德眞經廣聖義卷二)

○第三化云。始則太虛之氣。其氣相擊往來亂射。經百億萬氣之後。其氣方慢往來流行。爲自然之氣。此據佛書世界初成。風輪下旋之事也。又

號彌羅萬梵之氣。又經九萬九千九百九十九億氣之後。結吉祥之氣。成一聖人。自號元始天王。同時生五老。五行之主。其劫號延康。年號龍漢。又經如上氣數。乃生道君。時劫號赤明。年亦號赤明。同時生九老。分爲九天。又經如上氣數。方生老君。劫號清運。年號上皇。時生八公。又立五運・太易・太初等。老君乃以陰陽二氣。結爲混沌。而分布天地萬物始備矣。(辯二)

○第三化 尊宗室 太上老君。欲闡明大教。而化萬方曰。道不可無師尊。教不可無宗主。故老君師大道君。師元始天尊。(現)

○故聖人垂世立教。而有授受之法。(中略)道不可無師尊。教不可無宗主。故老君。師太上玉晨大道君焉。大道君即元始天尊之弟子也。(猶龍傳卷一、啓師資)。

○第五啓師資者。老君將顯明大教。布化萬方。乃曰。道不可無師尊。教不可無宗主。乃師事太上玉晨大道君焉。大道君即元始天尊弟子也。(道德真經廣聖義卷二)

○第四化。(辯なし)

○第四化 歷劫連 劫爲天地成懷之名。陰陽窮盡之數。天氣極於太陽。陽極則字。精化而爲水。地氣極於太陰。陰極則炁。精化而爲火。火焚水漂。三清之下。九地之內。毫末無爲。流爲五劫起。一伏周而還。始太上老君。經此離合之數。動經億劫。(現)

○劫者。天地成壞之名。陰陽窮盡之數。陽盡即生陰。故爲大水。陰盡即生陽。故爲大火。陽極於九。故云陽九。(猶

龍傳卷一、歷劫運

○第六歷劫運者。老君生於萬物之首。起於無始之前。經歷劫運甚爲久遠。劫者天地成壞之名。陰陽窮盡之數。陽盡則生陰。故爲大水。陰盡即生陽。故爲大火。陽極於九。故云陽九。（道德真經廣聖義卷二）

○夫天動地靜。陽躁陰遲。故有字蝕之異耳。此時天氣窮於太陰。地氣極於太陽。陽極則字。陰極則否。陽極則其精化爲水。陰極則其精化爲火。先焚爲大火。次漂以大水。上至九天之下。下至九地之內。金玉消化。毫末無遺。然後。元氣復合。謂之混沌。（中略）老君。歷此離合之數。經無量劫。（混元聖紀卷二）

○第五化云。老君。混沌之祖宗。天地之父母。故能分布清濁。開闢乾坤。（辯二）

○第五化云。天地有形之大者。太上老君。乃混沌之祖宗。天地之父母。故能分布清濁。開闢天地。運玄元始三氣而成。天上爲三清三境。卽始氣爲玉清境。元氣爲上清境。玄氣爲太清境。又以三清之氣各生三氣。合成九氣而爲九天。第一鬱單天。第二上禪壽無量壽天。第三梵藍須延天。第四寂然兜術天。第五波羅尼蜜不驕樂天。第六洞玄化應聲天。第七靈化梵輔天。第八高虛清明天。第九無想無愛天。此之九天各生三氣。每氣爲一天。合三十七天。通此九天爲三十六天。則三界四民上極三清。是其數也。初下六天爲欲界。一太黃天。二太明天。三清明天。四玄胎天。五元明天。六七曜天。次一十八天爲色界。一虛無天。二太極天。三赤明天。四恭華天。五曜明天。六皇笏天。七靈明天。八端靖天。九元明天。十極瑤天。十一元載天。十二太安天。十三極風天。十四始皇天。十五太黃天。十六無思天。十七阮樂天。十八曇誓天。次四天爲無色界。一霄慶天。二元同天。三妙成天。四禁上天。此二十八天名爲三界。此上又四天。名爲種人天。一常融天。二玉隆天。三梵度天。四賈奕天。此四天超出三界。又云。上

三天爲三清境。一曰太赤天。二曰禹餘天。三曰清微天。最上曰大羅天。包羅諸天。極高無上。玄都玉京鎮於其上。三尊所處焉。⁽¹⁰⁾又太霄隱書云。大道君治。在五十五重無極大羅天中玉京之上。七寶玄臺金牀玉几。金童玉女之所侍衛。住居在三十二天。三界之外。(辯一)

○第五化 闢天地 天地有形之大者。然有形生於無形。故能開闢天地者。無形也。無形者道也。太上老君。乃混沌之祖宗。天地之父母。故能分布清濁。開闢天地。乾坤之位也。(現)

○天地有形中之大者也。而有形生於無形。故能造天地。蓋無形者道也。(中畧) 蓋老君。乃混沌之祖宗。天地之父母故。(中畧) 分布清濁。闢闢乾坤。(中畧) 運真元始之三炁。而爲天。上爲三清三境。卽始炁爲玉清境。眞炁爲上清境。元炁爲太清境是也。又以三清之炁。各生三炁。合成九炁。而爲九天。第一鬱單無量天。第二上上禪善無量壽天。第三梵監須延天。第四寂然兜術天。第五波羅尼密不驕樂天。第六洞玄化應聲天。第七靈化梵輔天。第八高虛清明天。第九無想無結無愛天。此之九天。各生三炁。每炁爲一天。合二十七天。通此九天爲三十六天。則三界四民。上極三清。是其數也。初下六天爲欲界。一太黃天。二太明天。三清明天。四元胎天。五元明天。六七曜天是也。次十八天爲色界。一虛無天。二太極天。三赤明天。四恭華天。五曜明天。六皇笏天。七虛明天。八端靖天。九元明天。十極搖天。十一元載天。十二太安天。十三極風天。十四始皇天。十五太黃天。十六無思天。十七上揲阮樂天。十八無極曇誓天是也。次四天爲無色界。一霄度天。二元洞天。三妙成天。四禁上天是也。此二十八天。名爲三界。(中畧) 此上又四天。名爲種人天。一常融天。二玉隆天。三梵度天。四賈奕天。此四天超出三界。(中畧) 又上三天爲三清境。一曰太赤天。二曰禹餘天。三曰清微天。最上曰大羅天。包羅諸天。極高無上。玄都玉京鎮於其巔。三尊所處。(猶龍傳卷二、造天地)

○第七造天地者。老君乃天地之根本。萬物莫不由之而生成。(中畧)分布清濁。開闢乾坤。(中畧)運玄元始三氣。而爲天。上爲三清三境。卽始氣爲玉清境。元氣爲上清境。玄氣爲太清境是也。又以三清之氣。各生三氣三境。合生九氣爲九天。第一鬱單無量天。第二上上禪善無量壽天。第三梵監須延天。第四寂然兜術天。第五波羅尼密不驕樂天。第六洞元化應聲天。第七靈化梵輔天。第八高虛清明天。第九無想無結無愛天。此之九天各生三氣。氣爲一天。合二十七天。通此九天爲三十六天。則四民三界。上極三清。是其數也。初下六天爲慾界。第一太黃天。二太明天。三清明天。四玄胎天。五元明天。六七曜天是也。次十八天爲色界。一虛無天。二太極天。三赤明天。四恭華天。五曜明天。六皇始天。七虛明天。八端靖天。九玄明天。十極瑤天。十一元載天。十二太安天。十三極風天。十四始皇天。十五太黃天。十六無思天。十七上揲阮樂天。十八無極曇誓天是也。次四天爲無色界。一霄度天。二元洞天。三妙成天。四禁上天是也。此二十八天名爲三界。(中畧)此上又四天。名爲四種人天。一常融天。二玉隆天。三梵度天。四賈奕天。此四天超出三界。(中畧)又上三天爲三清境。一曰大赤天。二曰禹餘天。三曰清微天。最上曰大羅天。包羅諸天。極高無上。玄都玉京鎮於其巔。三尊所處。(道德真經廣聖義卷二)

○第六化云。老君。姓李。諱弘元曜靈。字光明。以上和七年歲在庚辰。九月三日甲子卯時。始育於北玄玉國天崗靈鏡山李谷之間。玄靈聖母既誕之夕。有三日於東方。九龍吐水。月妃散華。日童揚彩。年五歲體道凝眞。二十而有金姿玉顏。棄家離親。迢迹風塵。後感元始下教。授以鬱儀太章太洞眞經。紫微天帝玉清君。以瓊輿下迎。賜丹璽符書。爲上清金闕後聖帝君。掌握十天河海神仙。(辯二)

○老子生於天崗李谷。字曰光明。(辯一)

○第六化 隱玄靈 太上老君。於庚寅歲九月三日。託鬱單天北玄王國天罡靈鏡山李谷之間。玄靈聖母之胎。(現)
○猶龍傳には該當文なし。

○老君嘗以上和元年歲在庚寅。九月三日甲子。化生於鬱單北玄王國天罡靈鏡山李谷之間。上玄靈母九玄之房。初母之始孕。夢玄雲日月纏其形。六氣之電動其神。遂有妊。既誕之辰。有三日並出。乃以谷爲氏族。用曜景爲名。一名弘。字子光。一名玄水。字山淵。(中畧)紫微上真天帝玉清君。遣八景瓊輿來迎。以登上清宮。授藥剛丹・玉鳳璽・金眞玉光。給神虎之符。(中畧)受書爲金闕後聖帝君。(混元聖紀卷二)⁽¹¹⁾

○老君嘗。以上和元年歲在庚寅。九月五日甲子卯時。降生鬱單北玄因天剛靈鏡山李谷之間。上玄靈母九玄之房。乃以谷爲氏族。名弘丸。一名玄水。(太上混元老子史畧卷中)⁽¹²⁾

○第七化乃云。老君以上皇元年九月二日。出遊西河。遇元始天尊。乘八景玉輿。駕九色玄龍。群仙導從。手把華幡。師子白鶴嘯歌嘒嘒。同會西河之上。授老君洞玄玉符。(辯一)

○第七化 受玉圖 太上老君於上皇元年。出游行往西河。遇元始天尊。乘八景玉輿。老君稽首問曰。昔蒙訓授天書玉字二十四圖。今遇天尊。願垂成就。於是以洞玄內觀玉符。授老君。老君行三部八景并見天書玉字二十四圖(現)
○後聖君者。即老君也。以上皇元年九月十日(註畧)。出遊西河。歷觀八方。遇元始天王。乘八景玉輿。駕九色玄龍。三素飛雲。導從群仙。手執華幡。獅子白鶴。嘯歌嘒嘒。浮空而來。降西河之上。後聖君稽首請問曰。昔蒙訓授天書玉字二十四圖。(中畧)今遇天尊。喜慶難言。願垂成就。示以道眞。於是天王口吐洞元內觀玉符。以授君。(中畧)東向服符三部。八景神並見。金書玉字二十四圖空中煥明。洞徹無礙。(猶龍傳卷二、撰仙圖)

○初老君（中畧）以上皇元年甲子七月二日。出遊西河時。見元始天尊。乘八景玉輿。駕九色玄龍。三素飛雲。導從群仙。浮空而來。同會西河之上。天尊吐洞玄內觀玉符。以授老君。老君稽首承敎。服符三部。八景神身中並見。金書玉字二十四圖。空中自明。（混元聖紀卷二）

○第八化云。聖紀經云。太上老君。昔於龍漢之年。從元始天尊。於中央大福堂國。說靈寶十部妙經。出法度人。又於東極大浮黎國。出法度人。以紫筆書於空青之林。又於南極禪離界。以火煉真文瑩發字形。又於西極衛羅世界。北極鬱單國。皆出法度人。老君以五方真氣之精。結成寶字。大方一丈八角。垂芒爲雲篆之形。飛鳥之狀。以立文章。又云。墳典自我而出。經籍自我而生。（辯二）

○第八化 變真文 太上老君。以龍漢元年。於中央大福堂國。南極赤明國。東極浮黎國。西邪王國。北方鬱單國。太上以五方真炁之精。結成寶字。大方一丈八角。垂芒爲雲葉之形。成飛走之狀。（現）

○老君。於龍漢元年。分身於中央大福堂國。出真文赤書。以化其民。民皆長生。又於南極赤明之國。出火煉真文。（中畧）真文者。五方真炁之精。凝結成文。八角垂芒。或爲雲篆之形。或成飛走之狀。卽今之符文。（中畧）又於東極碧落之天。浮黎之國。書真文於空青之林。（中畧）又於西極衛羅世界西邪玉國。（中畧）又於北方鬱單之國。（混元聖紀卷二）

○第九化云。太上老君。以中皇元年三月一日。於玉清天金闕上宮。撰集靈篇以爲寶經三百卷。符圖七千章。玉訣九千篇。老君於上三皇時。出爲萬天法師。又號玄中法師。當龍漢元年。授上三皇洞真經一十二部。以無極之道。下

教人間。其時人壽九萬歲。於中三皇時。號有古先生。當赤明元年。授中三皇洞玄經一十二部。行無上正眞之道。以化於人。其時人壽六萬歲。於下三皇時。出爲師號金闕帝君。當開皇元年。授下三皇洞神經一十二部。以太平之道化人。其時人壽一萬八千歲。夫洞眞・洞玄・洞神各一十二部。合爲三十六部尊經也。(辯一)

○第九化 垂經教 太上老君。於中皇元年。命青童君考校天文。爲寶經三百卷。符圖七千章。玉訣九千篇。又於龍漢元年著洞元——福井本は洞眞につくるから、眞の誤寫であらう——經十二部。赤明元年降洞元經十二部。開皇元年出洞神經十二部。(現)

○吾(後聖君すなわち太上老君) 以中皇元年三月一日。於玉清天金闕之中。命東海青童君。尋俯仰之格。考校天文。

撰集靈篇爲寶經三百卷。符圖七千章。玉訣九千篇。以付上相青童君。俾傳未學合眞之人也。上清者。老君於上三皇時。人尙淳樸。以龍漢元年號玄中法師。以上清聖教一十二部。開度天人也。靈寶者。中三皇時。老君以赤明元年號有古先生。降靈寶眞經一十二部。開化一切救度兆人也。洞神者。下三皇時。人心樸散。老君以開皇元年號金闕帝君。出洞神經一十二部。開度萬品。謂之三十六部尊經也。(猶龍傳卷二、傳經蘊)

○第十演上清者。老君於上三皇時。人尙淳樸。以龍漢元年。號玄中法師。以上清聖教一十二部。大乘之道。開度人天也。第十一傳靈寶者。中三皇時。老君以赤明元年。號有古先生。降靈寶眞經一十二部。中乘之法。開化一切救度兆人也。第十二出洞神者。下三皇時。人心樸散。老君以開皇元年。號金闕帝君。出洞神經一十二部。小乘之法。開度萬品也。(道德眞經廣聖義卷二)

○老君在天皇時。號玄中大法師。亦曰通玄天師。出洞眞經一十二部。以無極大道下教人間。在地皇時。號有古大先生。出洞玄經一十二部。化人以無上正眞之道。在人皇時。號盤古先生。出洞神經一十二部。化人以太平無爲之道。

(混元聖紀卷二)

○第十化云。老子以殷十八王陽甲庚寅歲建午月。入於玄妙玉女口中。八十一年。至武丁九年庚寅歲二月十五日。聖母剖左腋攀李樹而生。生即行九步。步生蓮華。九龍吐水。具七十二相八十一好。左手指天。右手指地曰。天上天下唯道獨尊。我當闡揚無上道法。普度一切。又云。李靈飛。得修生之道真。妻天水尹氏。於厲鄉晝寢。見太上從天而下。化爲玄珠。吞而有娠。八十一年生而皓首。曰老子。生李樹下。指李爲姓。(辯二)

○圖云。老君以殷第十八王陽甲庚申歲。眞妙玉女晝寢。夢日精駕九龍而下。化五色流珠。吞之而孕。八十一年。至二十一王武丁庚辰二月十五日。其母攀李樹剖左脇而生。九步生蓮四方乘足。日童揚輝。月妃散華。七元流景祥雲。應庭。四靈翬衛。玉女捧接。其母攀枝。萬鶴翔空。九龍吐水。七十二相八十一好。指天指地。唯道獨尊。(辯三)

○第十化 傳五公 中皇之後。太上老君。昔於河上。傳十三虛無聖人。行於五公術。(現)

○第十八化 誕聖日 太上老君。以殷十八王陽甲庚申歲。眞妙玉女晝寢。夢吞日精化五色流珠。因而有孕。八十一年。至三十二王武丁庚辰歲二月十五日。聖母因攀奢樹。剖左腋而生。又玄中記所載。李靈飛得修真之道。不仕。其妻尹氏晝寢。夢天開數丈。見太上乘日精駕九龍而下。化五色流珠。吞之有孕。(現)

○老君(中畧)以商第十八王陽甲十七年庚申之歲。託孕於玄妙玉女(中畧)流入玄妙玉女口中。(中畧)玄妙玉女以晝寢。夢吞五色流珠。因而有娠。(中畧)八十一年。(中畧)當商二十二王武丁九年庚辰歲降生也。(中畧)雖依聖母之孕。乃剖左腋而生也。第七。降生之時登行九步。步生蓮花。(中畧)日童揚輝。月妃散華。七元流景祥雲應庭。四靈翬衛。玉女捧接。聖母因攀李枝。(中畧)萬鶴翔空。九龍吐水。(中畧)左手指天。右手指地曰。天上天下唯道爲

尊。(中畧) 卽商武丁九年庚辰歲二月十五日是也。(中畧) 七十二相八十一好。(猶龍傳卷三、降生年代)

○按玄中記云。李靈飛當商之時。父子相承。得修生之道。(中畧) 以天水尹氏之女爲妻。(中畧) 其妻嘗因晝寢。夢天開數丈。衆仙捧日出。良久見日漸小。從天而墜。化爲五色之珠。大如彈丸。夢中得而吞之。因而有孕。八十一年。(中畧) 按玄妙玉女元君內傳云。(中畧) 玄妙玉女降於人間。爲天水尹氏之女。嫁李靈飛爲妻。玄妙晝寢。老君乃乘日精駕九龍。化爲五色流珠。下入口中。託孕而生。既生乃指李曰。此吾姓也。(猶龍傳卷三、明宗緒)

○老君(中畧) 乃先命玄妙玉女。降爲天水尹氏之女。名益壽。適仙人李靈飛。玄妙玉女。卽無上元君也。靈飛(中畧) 得修生之道。(中畧) 至商十有八世王陽甲踐祚之十七年庚申之歲。老君自大清境分神化氣。乘日精駕九龍。化爲五色流珠下降。時尹氏晝寢。夢天開數丈。衆仙捧日出。良久見日漸小。從天而墜。爲五色珠。大如彈丸。因捧而吞之。覺而有娠。(中畧) 八十一年。(中畧) 至商二十一王武丁之九年庚辰歲二月建寅十五日卯時。聖母因攀李枝。忽從左腋降生。(中畧) 降生之初。卽行九步。步生蓮華。左手指天。右手指地曰。天上地下惟道獨尊。我當開揚無上道法。普度一切動植衆生。(歷世眞仙體道通鑑後集卷一、無上元君)⁽¹³⁾

○第十一化云。老君在伏羲時。號鬱華子。說元陽經。教伏羲。敍人倫畫八卦。在祝融時。號廣壽子。說按摩通精經。教以鑽木出火。陶冶爲器。在神農時。號大成子。說太一元精經。教以播種五穀採和諸藥。在黃帝時號廣成子。教以抱神守靜之道。在少昊時。號隨應子。說莊敬經。教以鳥官爲理。分布九屬。以統百司。在顓頊時。號赤精子。說微言。帝嚳時。號錄圖子。說黃庭經。帝堯時。號務成子。說宣化經。帝舜時。號尹壽子。說通玄經七十卷。又說道德經一千二百卷。夏禹時。號眞行子。說元始經六十卷。殷湯時。號錫則子。說長生經二十卷。周文王時。號

燮邑子。說赤精經。教以仁孝之道。乃至云。上古之君皆受教於老子。然後造作群物也。(辯二)

○第十一化云。老君以清漢元年七月一日。託玄神玉精。降太元玉女。千三百年。號無上老子。一號大千法王。(辯二)

○第十一化 讚元陽 太上老君。在伏羲時。爲人朴將散。以清濁元年。號鬱華子。說元陽經。伏羲行之。以畫八卦造書契。觀象取法。則制嫁娶。敍人倫。(現)

○老氏(中畧)在伏羲氏時。人已澆漓而未有法度。老君號鬱華子。下爲師。說元陽經。教以畫八卦。造書契以通神明之德。以類萬物之情。仰則觀象於天。俯則觀法於地。爲文教之始也。(猶龍傳卷二、爲帝師)⁽¹⁴⁾

○第十三垂文象者。伏羲之時。人已澆漓。未有法度。老君以清濁元年號鬱華子。下爲師。說元陽經。教伏羲畫八卦。以通神明之德。以類萬物之情。仰則觀象於天。俯則取法於地。制嫁娶。敍人倫焉。(道德真經廣聖義卷二)⁽¹⁵⁾

○在伏羲時。降于田野。號鬱華子。授天皇內文。又降河圖八卦之文。教人以順性之道。(混元聖紀卷二)⁽¹⁵⁾

○第十二化云。老君以清漢元年。寄九天飛玄玉女。八十一年。號高上老子。(辯二)(なお、第十一化参照)

○第十二化 置陶冶 太上老君。在祝融時。爲人食生冷。以天漢元年。號廣壽子。說按摩通精經。祝融行之。乃鑽木出火。陶冶爲器。(現)

○在祝融時。人食生冷。未知火化。故多疾苦。老君號廣壽子。下爲師。說按摩通精經。教以安神之道。乃鑽木出火。陶鑄爲器。以變生冷。人保其壽。故陶鑄之法自茲始也。(猶龍傳卷二)

○在祝融時。降于恒山。號廣壽子。授人皇內文。教人以安神之道。俾陶鑄爲器。以變生冷。(混元聖紀卷二)

○第十五教陶鑄者。祝融之時。人食生冷。未知火食。老君以天漢元年。號廣壽子。下爲師。說按摩通精經。教陶鑄

爲器。以變生冷。人保其壽焉。(道德眞經廣聖義卷二)

○第十三化云。老君。以清漢元年甲午九月九日。降元素玉女。七十三年。號九靈老子。(辯二)(なお第十一化參照)

○第十三化 教稼穡 太上老君。在神農之時。爲世人捕食禽獸。於清漢元年。號大成子。居濟陰。說太乙元精經。神農行之。乃播百穀。以代烹殺和諸藥。以救疾病。(現)

○在神農時。人捕禽獸茹毛飲血。老君號大成子。下爲師。說元精經。教以化生之道。播百穀以代烹殺和百藥。以救百病。(猶龍傳卷二)

○第十四示好生者。神農之時。人食禽獸茹毛飲血。老君以清漢元年。號大成子。下爲師。說太上元精經。教以化生之道。播百穀。以代烹殺和百藥。以救百病。(道德眞經廣聖義卷二)

○在神農時。降于濟陰。號大成子。授地皇內文。教人以好生之道。俾播植穀果。以代烹殺和合方藥。救疾養性。(混元聖紀卷二、太上混元老子史畧卷中)

○第十四化(辯なし)

○第十四化 始器用 太上老君。在伏羲之後。示以世法。制禮樂。造衣裳。作宮室。創舟車。置棺槨。措弧矢。立刑獄。修書契。服牛馬。成杵臼。爲重門以日中爲市。(現)

○自伏羲之後。老君示以世法。制禮樂。以敍尊卑。造衣裳。以明貴賤。作宮室。以代巢穴。爲舟車。以濟不通。置棺槨。以免衣薪。造弧矢。以威不順。立刑獄。以戒兇暴。造書契。以代結繩。服牛乘馬。引重致遠。日中爲市。

交易而退。耒耜杵臼之利。重門擊柝之規。皆出於此矣。（猶龍傳卷二）

○第十七作形器者。自伏羲之後。老君示以世法。制禮樂。以敘尊卑。造衣章。以明貴賤。作宮室。以代巢穴。爲舟車。以濟不通。置棺槨。以代衣薪。造弧矢。以威不順。立刑獄。以戒兇暴。造書契。以代結繩。服牛乘馬。引重致遠。日中爲市。交易而退。耒耜杵臼之利。重門擊柝之規。並老君教。於時君以化於物也。（道德真經廣聖義卷二）

○第十五化（第十一化參照）（辯）

○第十五化 住崆峒 太上老君在黃帝時。號廣成子。居崆峒山。黃帝往見。而問至道。曰所問者。物之質。奚足以及至道。帝退閑居三月。復往邀之。膝行而問治身。曰善哉問乎。至道之精。窈窈冥冥。至道之極。昏昏默默。無視無聽。抱神以靜。行將自正。帝聞之廣成子之謂也。（現）

○在黃帝時。老君號廣成子。（中畧）在於崆峒之上。故往見之曰。（中畧）敢問至道之精。（中畧）廣成子曰。而所欲問者物之質也。（中畧）又奚足以語至道邪。黃帝退。捨天下（中畧）閑居三月。復往邀之。（中畧）黃帝順下風膝行而進。（中畧）問治身。（中畧）善哉問乎。（中畧）至道之精。窈窈冥冥。至道之極。昏昏默默。無視無聽。抱神以靜。形將自正。（中畧）黃帝再拜稽首曰。廣成子之謂天矣。（猶龍傳卷二）

○第十八崆峒演道者。黃帝時。老君號廣成子。居崆峒山。黃帝詣而師之。爲說道戒經。教以理身之道。（道德真經廣聖義卷二）

○在黃帝時。降于崆峒山。號廣成子。（中畧）乃往見廣成子。而問曰。（中畧）廣成子曰。而所問者。物之質也。（中畧）奚足以語至道。黃帝退。捨天下。（中畧）順下風膝行而進。再拜稽首。問曰。聞吾子達於至道。敢問。治身奈

何。(中畧)善哉問乎。(中畧)夫至道之精。杳杳冥冥。至道之極。昏昏默默。無視無聽。抱神以靜。形將自正。(中畧)黃帝再拜稽首曰。吾子之謂天矣。(混元聖紀卷二、太上混元老子史畧卷中)

○第十六化 (辯なし)

○第十六化 爲帝師 太玄玉女。少昊時人。居蜀長松山。修長生道。感太上老君與群仙。降於山左巨石之上。神光照映。玉女馳往。太上老君以八隱文授之。(現)

○第十七化 (第十一化參照) (辯)

○第十七化 授隱文 太上老君。在少昊。顓頊。帝嚳。唐堯。虞舜。夏后。殷湯時。皆有所授之經。(現)

○在顓帝時。老君下爲師。號赤精子。居衡山。授帝微言經。教以忠順之道。在帝嚳時。老君下爲師。號錄圖子。居江濱。授帝黃庭經。教以清和之道。在帝堯時。老君下爲師。號務成子。居姑射山。授帝政事離合經。教以廉謹之道。在帝舜時。老君下爲師。號尹壽子。居河陽。授舜道德經。教以無爲清靜之道。(中畧)在夏禹時。老君下爲師。號眞行子。居商山。授禹德戒經。教以勤儉之道。又授靈寶五符・檄召神鬼之法。(中畧)商湯時。老君下爲師。號錫則子。居濠山。授長生經。教以恭愛之道。(猶龍傳卷二)

○第十九衡嶽授經者。顓頊時。老君下爲師。號赤精子。居衡山。授帝微言經。教以忠順之道。第二十江濱應化者。帝嚳時。老君下爲師。號錄圖子。居江濱。授帝黃庭經。教以清和之道。第二十一姑射宣眞者。唐堯時。老君下爲師。號務成子。居姑射山。授帝政事離合經。教以廉謹之道。第二十二傳道德者。帝舜時。老君下爲師。號尹壽子。

居河陽。授舜道德經。說孝悌之道。此上下二經出於茲焉。第二十三教理水者。夏禹時。老君下爲師。號眞行子。居商山。授禹戒德經。說勤儉之道。又授靈寶五符。檄召神鬼。(中畧)第二十四述長生者。殷湯時。老君下爲師。號錫則子。居潯山。授長生經。說恭愛之道。(道德眞經廣聖義卷二)

○老君。在少皞時。復降于崆峒山。號隨應子。說莊敬經。教以順時行令。在顓頊時。降于衡山。號赤精子。說微言經。教以忠順之道。在帝嚳時。降于江濱。號錄圖子。說黃庭經。教以清和之道。(中畧)在帝堯時。降于姑射山。號務成子。說玄德經。教以謙遜之道。在帝舜時。降于河陽。號尹壽子。說道德經。教以無爲之道。又傳道與彭祖。(中畧)在夏禹時。降于商山。號眞行子。教以勤儉之道。授九疇書。(中畧)授以玉書靈寶五符。治水眞文。及罪步勅召鬼神之法。(中畧)在商湯時。降于潛山。號錫則子。說長生經。教以恭愛之道。(混元聖紀卷二)

○在少皞時。號曰隨應子。說莊敬經。教以順時行令。在顓頊。而降於衡山。號赤精子。說微言經。教以大順之道。在帝嚳時。號錄圖子。授黃庭經。教以清和之道。在帝舜之時。降于河陽。號尹壽子。授道德經。教以無爲之道。在夏禹時。降于商山。號眞行子。教以勤儉之道。授九疇靈書。靈寶五符。治水眞文。及罪步檄召鬼神之法。在商湯時。降于潛山。號錫則子。說長生經。教以恭愛之道。(太上混元老子史畧卷中)

○第十九化云。周文王時。老君爲樊邑子。時帝紂荒唐。天下塗炭。乃乘飛鸞之輪。風伯前驅。彭祖驂乘。降於岐山之陽。西伯聞之。拜爲守藏吏。武王克商。遷爲柱下史。作赤精經。教文王以仁義之道。作璇璣經以授周公。(辯二)○第十九化 爲柱史 太上老君。於周文王時。號變_レ邑子。居岐山。周聞之。拜守藏吏。作赤精經。及周克商。拜柱下史。值璇璣經。授周公。成康時復爲柱下史。(現)

○文王爲西伯時。號變邑子。時帝辛荒唐。天下塗炭。乃乘鸞之輪。以風伯前驅。彭祖駢乘。降岐山之陽。西伯聞之。拜爲守藏史。作赤精經。教以仁信之道。(中畧)武王克商。號育成子。遷柱下史。作璇璣經。又以道授周公也。(猶龍傳卷三、爲柱史)

○老君。以商紂荒唐。生靈塗炭。哀憫斯民。將下而拯救之。乃以紂之二十一年丁卯歲。(中畧)乘飛鸞之輪。風伯前驅。彭祖駢乘。降岐山之陽。號變邑子。西伯召爲守藏史。作赤精經。教以仁信之道。至武王時。號育成子。遷爲柱下史。作璇璣經。(太上混元老子史畧卷下)

○老君鑑紂荒唐。生靈塗炭。周文王爲西伯。(中畧)遂分炁化身。乘飛鸞之輪。降于岐山之陽。號變邑子。說赤精經。教人以仁信之道。西伯聞之。召爲守藏史。武王克商。踐祚。遷爲柱下史。改號育成子。作璇璣經。(混元聖紀卷三)

○第十九化云——前文に續く文章——。成王・康王之代。世爲柱下史。昭王時有黑氣之祥。此破佛生夜虹十二道入貫太微之事老君以八

天隱文。授昭王。王不用之。後感膠船之難。(辯二)

○第二十化 棄周爵 太上老君。歷周成康之世。免退歸亳。昭王時見黑氣禊之祥。以八天隱文。授昭王。王不信。後有膠船之難。(現)

○成王時。爲師號經成子。康王時爲師號郭叔子。復爲柱下史。(中畧)昭王時。太上復命老君開化西極。因而退官。(猶龍傳卷三、爲柱史)

○在成王時。號經成子。說廣化經。又以道授周公旦。乃退而閑居。(中畧)至康王時還。歸于周。號郭叔子。復爲柱下史。(中畧)昭王時。老君知周室之將衰。乃以八天隱文。授王。令保鎮國祚。(混元聖紀卷三)(太上混元老子史畧卷

下はほぼ同文)

○第二十一化 (辯なし)

○第二十一化 過函關 太上老君。欲之流沙。先有紫氣。西度函關。周大夫尹喜爲關令。見之。乃齋戒以俟。後七月十二日。果太上老君。駕青牛車至。喜曰。聖人來矣。老君曰。何以知之。喜曰。去冬天理星西行過昴。邇秋融風三至。東南真炁。狀如龍蛇。此真人至之驗也。(現)

○老君。以昭王二十五年癸丑五月壬午去周隱居。尋欲西之流沙。以化異俗。乃有紫炁。西度函谷關。昭王大夫尹喜善觀乾象。知有聖人將度關。乞出爲關令。乃齋戒夾道焚香掃洒以候焉。七月十二日老君駕青牛之車。(中畧)西度關。(中畧)喜曰。聖人來矣。(中畧)老君又曰。子以何所見而知之。喜答曰。去冬十月。天理星西行過昴。今又自秋朔融風三至。加之東南真炁。狀如龍蛇。而西度。此眞人之驗也。(猶龍傳卷三、度關試關令)

○老君。復欲開西域。乃以昭王二十三年癸丑五月壬午。駕青牛之車。(中畧)西度函關。初尹喜。(中畧)瞻見東方有紫炁西邁。天文顯瑞。知有聖人當度關而西。乃求出爲函谷關令。王從之。(中畧)至七月十二日甲子。果有老人皓首。(中畧)老君曰。子何所見而知吾。(中畧)喜曰。去冬十月天理星西行而過昴。(中畧)自今月朔融風三至。東方青氣。狀如龍蛇而西度。此大聖人之徵。(混元聖紀卷三)

○第二十二化 (辯なし)

○第二十二化 試徐甲 太上老君謂弟子徐甲曰。吾欲往西域。至函谷。潛試之。乃令甲牧牛。以吉祥草。化一女子。

行及牧牛所。甲惑之。^{惑カ}遂廢約索金。太上老君曰。昔汝命盡。吾以太玄生符。投之即活。言訖。符甲口中飛出。復爲白骨。尹喜稽首。願赦其罪。太上老君即以符投。甲形如故。(現)

○昔有御太上車者姓徐名甲。老君謂曰。吾欲往西海(中畧)諸國。今汝御車。與汝顧直日百錢。候諸國還以黃金頓償。甲如約御車。至函谷關。老君欲試之。乃令甲牧青牛于野。以吉祥草化一女子。(中畧)行及牧牛之所。輒戲以言。甲惑之。(中畧)遂廢約(中畧)索顧金。老君曰。(中畧)汝昔已命盡。吾以太玄生符投之。即再活。汝奚不念此。言訖符自口中飛出。(中畧)甲復化爲白骨。關令(中畧)因稽首于前曰。(中畧)還顧大聖哀矜。赦其罪戾(中畧)老君納關令之言。即再以符投枯骨中。復如故。(猶龍傳卷三、試徐甲)

○老君之御者徐甲。(中畧)老君謂曰。吾欲往西海(中畧)諸國。令汝御車。還當以黃金計直償汝。甲如約。及至關。令飯青牛于野。老君欲試之。乃以吉祥草。化爲一美女。行至牧牛之所。輒以言戲甲。甲惑之欲留。遂負前約。乃詣關令訟老君。索顧錢。老君謂甲曰。汝隨我二百餘年矣。汝已久應死。吾以太玄陽生符與汝。汝所以得至今日。汝奚不念此。而訟吾。言訖符自甲口中飛出。丹篆如新。甲即成一聚白骨。喜憫甲違心至死。乃爲甲叩頭。請命願赦其罪。得以更生。(中畧)乃復以太玄陽生符投之。甲即立生。(混元聖紀卷三)

○第二十三化云。老子以周昭王二十三年七月十二日。至函關。尹喜既見。邀歸本第。說道德經二篇五千餘言。尹喜扣頭曰。願授其要。老君曰。善。乃爲解道德之要。曰。道者爲泥丸。泥丸者天德也。理在人頭中。紫氣下降。下至丹田。名堵。謂脾也。脾者中黃太一也。黃氣徘徊理中宮。萬物之母者。謂丹田也。丹田玄牝也。居下元中半夜之時。一氣下降。周旋三宮。同出而異名者謂精也。一曰精。二曰汗。三曰血。四曰液。故曰異名。玄之又玄者。

謂左右腎也。衆妙之門。道可道者。謂朝食美也。非常道者。謂暮爲尿。(註畧)有無相生。謂口與腹也。難易相成。謂精與氣也。此老子授尹喜節要也。又授尹喜。神丹經・金液經及八煉九還丹・伏火之訣。其方云。金液還丹。仙華流高。飛雲翔登天丘。赤黃之氣成。須臾當得雌雄分亂。珠可以騰變。致行厨。靈童玉女。我爲夫出入無間。天同符。眞精凝霜。善沉浮。汝其珍敬。必來游。又授九丹之名。及歌曰。

圓三五	寸一分	口四八	兩寸唇	長二尺	厚薄均	腹三齊	坐垂溫	陰在上	陽下奔
首尾武	中間文	始七十	終三旬	內二百	善調勻	陰火白	黃芽鉛	兩湊聚	輔翼人
子處宮	得安存	去來游	不出門 <small>(辯二)</small>						

○第二十三化 訓尹喜 太上老君。西邁遇尹喜。邀聖駕。至終南尹喜故宅。乃結草爲樓。將隱焉。喜乞著書。太上老君。乃授喜道德經五千言。大丹設節解之要。(現)

○齋戒問道。至十二月二十五日挂冠不仕。二十八日授道德一篇。(中畧)仍授喜金液九丹之術。又授太清八符。觀天九都。神丹。金液等經。(猶龍傳卷三、授關令道德二經)

○其年癸丑七月十二日甲子。果遇老君乘白輿。駕青牛而至關。(中畧)關令於是設坐官舍。行弟子之禮。(中畧)關令又稽首曰。道德二篇。(中畧)乞授一言得以生活。老君曰善。乃爲注五千文次第。節解以授之焉。其要曰。道者謂泥丸也。名者謂脾也。母者謂丹田也。泥丸者天德也。理在人頭中。紫氣降下。下至丹田。脾者中黃太一也。黃氣徘徊。理中宮。其神太白守之。中有神一。不可不思。丹田者玄牝也。却著脊脊居下元中。夜半之時。一氣下降。周旋三宮妙。謂守虛無也。異名謂精也。一曰精。二曰汗。三曰液。四曰血。五曰涕。六曰睡。故曰異名。玄之又玄。謂左右腎也。衆妙之門。人死氣絕於口。故曰衆妙之門。夫朝食其美。暮爲尿。故曰惡也。人行道將以備死。

(中畧) 有無相生。謂口與腹也。難易相成。精與氣也。(中畧) 老君於是授喜太清八符經・太清觀天經・九都經・神丹經・金液經。及入鍊九轉還丹。伏火之訣焉。其方曰。金液還丹。仙華流高。飛雲翔登天丘。赤黃之物成。須臾當得雄雌紛亂。珠可以騰變致行厨。靈人玉女。我爲夫出入無間。天同符。其精凝霜。善沈浮。汝其震驚必來游。九丹曰第一曰丹華。第二曰神符。第三曰神丹。第四曰還丹。第五曰餌丹。第六曰鍊丹。第七曰柔丹。第八曰伏丹。第九曰寒丹。又歌曰。圓三五。寸一分(下畧)(太上混元真錄)¹⁶

○又云。老君以周昭王二十四年四月八日。上昇太微。復生於成都李氏家。與尹喜會。復上昇適西竺。使尹喜作佛以化胡人。(辯三)

○第二十四化 升太微 太上老君。以昭王二十六年甲寅。實錄云二十四年甲寅。將欲昇天。告喜曰。子千日清齋之後。往城都青羊肆。尋吾。言訖不見。喜卽叩頭告曰。願復一見。卽仰視。見太上老君坐雲華之上。狀若金人。與諸仙昇太微。(現)

○太上欲西徂流沙。喜叩頭請侍行。老君曰(中畧) 止念靜心。守一千日清齋。鍊形入妙。則可尋吾於蜀郡青羊肆。喜唯唯而謝。老君忽然。冉冉昇入太微。(猶龍傳卷三、授關令道德二經)

○老君。次年甲寅歲四月二十八日。將於喜宅。南山阜上。辭決昇天。(中畧) 老君重告喜。以除垢止念靜心守一之旨戒喜曰。千日之外。可尋吾於蜀青羊之肆矣。言訖。聳身空中。坐雲華之上。面放五明。身現金光。洞照十方。冉冉昇空。(中畧) 良久乃沒。(混元聖紀卷三)

○老君。以甲寅年四月八日。於宅南山館。臨欲昇天。重告關令曰。子當千日清齋。修習吾經三年之後。往成都市青

羊之肆。尋吾乃可得焉。言訖。(中畧)忽然不見。(中畧)喜出中庭叩頭曰。願神人復以一見。授吾一要。得以守元。即仰視。觀懸身坐空中雲光之上。去地數十丈。其狀金人。(中畧)與諸仙昇乎太微焉。(太上混元真錄)

○第二十五化(辯第二十四化と合一さる)

○第二十五化 會青羊 太上老君。化身下降於蜀。託孕李氏家。丁巳尹喜至蜀。尋於市中。見人牽羊。喜自解。既有青羊。又在市肆。太上所約此是也。遂問牽羊何往。荅曰。家去。喜隨往。令告尹喜至。地踴玉局。太上老君化白金之身。坐其玉局上。賜喜文始先生號。(現)

○按混元本紀云。太上以甲寅年昇天。至乙卯分身潛降於蜀。託孕大官之家。丁巳尹喜方至蜀。(中畧)尹喜於市肆。見人牽之。自解云。既有青羊。復在其肆。老君所約此當是也。因問云。此羊乃誰家者。荅曰。我家夫人誕一子。啼聲不止。(中畧)有道人言。得青羊乳與之。啼即止。故市此羊。喜囑曰。爲我告夫人之子云。關令尹喜至。(中畧)既入。太上或長丈餘。身作金色。(中畧)拜爲文始先生。(猶龍傳卷四、青羊)

○老君。以甲寅年昇天。至乙卯歲復從太微宮分身。降生於蜀國太官李氏之家也。(中畧)尹喜至。(中畧)老君化數丈白金之身。(中畧)坐於蓮花之上。(中畧)賜以文始先生之號。(混元聖紀卷三)

○老君。以甲寅歲升天。至乙卯年(中畧)分身降生於蜀太官李氏之家。(中畧)喜至蜀。徧問諸人無識青羊肆者。忽見童子牽羊。因自解云。既有青羊。復在市肆。聖師所約其在是耶。因問此童誰家羊。牽欲何往。(中畧)尋得將欲還家。喜即囑曰。(中畧)尹喜至矣。(中畧)既入其家。庭宇自然寬平。湧出千葉蓮花之座。老君忽化數丈白金之身。(中畧)坐于蓮花之上。(中畧)授喜文始先生號。(太上混元老子史畧卷下)

○第二十六化云。是時。老君於青羊大會。引尹喜冉冉昇空。初至第一天。見波利天帝。乘九光元靈之輿。蔭七元交晨之蓋。建五色攝魔之節。金童玉女九萬人。迎老君入大有宮。請問自然之道。如是摩夷天・梵寶天・化應天・不僑樂天・兜率天・須延天・禪善天・鬱單天。隨處天帝。皆與天童玉女。迎禮老君。請問法要。所到天宫。皆設瓊漿碧醴。丹液流薰。蘭羞八徹。靈芝珍果。(辯一)

○第二十六化 游諸天 太上老君。與尹喜上朝元始。游群帝之鄉。所至天宫。見天帝。乘九靈之輿。蔭七元之蓋。建攝魔之節。迎太上老君。求問至道。(現)

○又與喜潛遊四海。(中畧) 次遊九天。初至第一天。見波利天帝。乘九靈玄雲之輿。蔭七元交晨之蓋。建五色攝魔之節。從官及玉童玉女九萬人。迎老君入大有宮。請問自然之道。次遊第二天見摩夷天帝(中畧) 梵寶天(中畧) 化應天(中畧) 不僑樂天(中畧) 兜術天(中畧) 須延天(中畧) 禪善天(中畧) 鬱單天(中畧) 所到天宫。皆設瓊英玉實。月液雲漿。碧醴流薰。蘭羞八徹。靈芝妙果。(猶龍傳卷四、青羊)

○老君謂喜曰。吾將與汝上朝玉晨。遊歷帝鄉。(中畧) 冉冉昇虛。遂徧歷九天。諸天帝君皆來迎老君。老君入其宮宇。設瓊英玉實。月液雲漿。靈芝仙果。(混元聖紀卷四)

○第二十七化(辯なし)

○第二十七化 入闕賓 太上老君。授太上老君之命。化西域。入闕賓。居窟山。胡王出獵。見虹蜺貫日。蓋見太上老君。問是何人。答曰修道之人。王曰。不聞有道。曰。大道彌隆。王改宜宣奉焉。(現)

○至闕賓行化。暫止于近郊山谷。(中畧) 時王出獵至山。有五色光炁貫日。怪而尋之。乃遇老君。王問曰。公是何人。

老君曰。吾是修道之士。(中畧)王曰道是何物。(中畧)王曰。吾自建國以來。不聞有如是事。(混元聖紀卷四)

○第二十八化(辯なし)

○第二十八化 化王子 麴賓王子七人。將侍從至太上會所。拜曰。我生邊境。幸遇聖人。乞教存安之道。太上曰。宜修三順六微之要。內保乎己。外以成和。王子等頓首奉行。(現)

○(對應資料見當らず)

○第二十九化(辯なし)

○第二十九化 集聖衆 胡王與徒衆。再至山中。稽首問曰。前說深奧。未任奇妙。欲行何法。太上曰。昨令汝等事佛。吾以中食化之。王舉國就會。七日別去。王子復請太上中食。太上召十萬六通神人。經月而來不已。王子倉庫空已及半。神人來而不止矣。(現)

○(王)復到屈山。又遇老君問曰。(中畧)且修中食漸省殺獵。以化國人。可乎。(中畧)老君欲化其國令悉信向。乃謂王曰。今請爲王設中食。願率群臣衆庶。悉來會食。因觀法。(中畧)五方山谷隨其方色。化爲宮殿。陳設帷帳。飛仙百億。悉爲給使。天厨飲食不可稱數。(中畧)遂舉國俱來。就會七日。(中畧)海內群仙皆來赴會。來者相續於路。月餘不絕。王倉庫。將竭。齋未及半。(混元聖紀卷四)

○第三十化云。胡王。見太上徒衆甚多。疑見鬼魅。遂積薪焚之。火起衝天。老君放身光明。火中爲王說金光明經。

胡王益怒。納之大鑊煮之三日。老君鑊湯之中。蓮華涌出。坐蓮華上說涅槃經。

又云。老君使尹喜爲佛。與胡王爲師。懺悔三業・六根・五逆・十惡。乃說五戒十善。并四十二章經。(辯二)

○第三十化 演金光 胡王曰。太上徒衆果多。令我倉庫將傾。豈是有道之人耶。我向察之。必是鬼魅。若不早圖。恐彌損害。宜急焚之。積薪兵圍。太上遜意而入。國人皆見。太上身放光明。火中爲說金光明經。(現)

○乃生悔心。王召群臣。謀曰。道士徒衆何乃果多耶。予設中食。本祈益國。今乃傾我倉庫。恐是鄰敵。姦謀故遣來害我國。不然必是鬼魅。若不早圖。恐彌損國。汝等急宜焚殺。(中畧)於是群胡積薪。(中畧)將兵圍繞。(中畧)老君與諸仙。怡然赴火。隨煙出沒。身更精明。(混元聖紀卷四)

○第三十一化 (辯なし、ただし卷二第三十化二項参照)

○第三十一化 起青蓮 胡王其怒益甚。又以大鑊煮之三日三夜。鑊湯之中。蓮花湧出。太上坐蓮花上。說蓮花經。謂王曰。此經神力不可思議。能辟湯火。汝可奉行。(現)

○王益發怒。又燒大鑊令煎煮之。老君忻然入沸湯中。談笑自若。(混元聖紀卷四)

○第三十二化 (辯なし、ただし、第三十化三項参照)

○第三十二化 捧神龍 胡王轉怒。遂令沈於水中。太上老君。亦遜水而入。水不能溺。神龍捧於水上。爲說涅槃經。(現)

○(王) 又令左右沈之深淵。老君入水。凌波越流。身放光明。(混元聖紀卷四)

○第三十三化（辯なし、ただし、卷二十四十二化三項參照）

○第三十三化 摧劍戟 胡王告隣國曰。國內有一老人。變化無常。願與兵跟助。頃間。胡兵悉圍老君害之。太上身放威光飛電。入衝聲如霹靂。矢力夫石反中胡兵。胡王投地作禮。伏道歸教。（現）

○（胡王）乃急遣使。以告隣國曰。有一妖魅。（中畧）變化不常。處吾國山谷中。我投之水火。皆不能殺。恐更與妖害及諸國。請速興兵。相共誅戮。旬月之間。胡兵並集。共圍老君。（中畧）俄而風雷四合。天地震動。胡兵矢石。皆自反中。（中畧）胡兵驚懼。一時奔潰。胡王（中畧）五體投地。（混元聖紀卷四）

○第三十四化云。老君告胡王曰。使我弟子爲佛。汝當師之。即使尹喜變身爲佛。與胡人爲師。令作桑門。授以浮圖之法。說四十二章經。

又云。老君至舍衛國。自化作佛。坐七寶座。身長百千萬丈。徧滿虛空。

又云。老君將欲再整釋教。以周莊王九年。乃於梵天命煩陀王老君弟子。乘月精。託陰天竺摩耶夫人胎。至十年四月八

日右脇誕生。後入雪山修行六年。道成。類佛陀。衆號耒牟尼。至匡王四年解化。太上命昇賈奕天。爲善惠仙人。

（辯二、なお第三十化三項參照）

○第三十四化 說浮屠 太上老君。令尹喜爲佛。乃語胡王曰。已告汝師赦汝罪犯。群胡歡喜。於是。太上說四十二章經。乃遣飛天神王。率國人生喜心者。剃鬚髮。偏袒合掌。赭衣以作浮屠喪門。授以浮屠之教。（現）

○老君。乃戒王曰。今釋汝罪。汝宜奉浮屠法。（中畧）王及群胡。莫不歡喜。頭面著地。合掌禮謝。（中畧）老君指尹真人示胡王曰。此吾之弟子無上真人。命爲汝師。（混元聖紀卷四）

○第三十五化（辯なし。ただし卷二、第四十二化五項参照）

○第三十五化 降外道 太上老君。住薩羅國舍提婆城。坐獅子與諸仙。降伏九十六種邪道。不使冥生鬼神。流布世間。（現）

○第三十六化（辯なし、ただし、卷二、第四十二化六項参照）

○第三十六化 藏日月 太上老君。迦夷國其王好殺。初不信眞。及見凌犯。太上左手把日。右手把月。藏於頭中。天地冥昧。國人恐怖。（現）

○第三十七化（辯なし、ただし、卷二、第四十二化四項参照）

○第三十七化 撥太山 太上老君。至條支國。有邪師。行幻法。王謂之聖人。王令却。國有太山。太上令尹喜制山。山遂不動。王請太上却之。太上以九節杖。撥而擲之。如人弃一把土爾。王與國人。不復奉邪師一心歸道。奉太上永爲弟子。（現）

○老君遂至條支國。其國王奉事外道魔師。曰謂是聖人。（中畧）凡十二年。廣行幻術。王敬信之。一日語魔師曰。國中大山。當道妨人行路。（中畧）魔師曰可。明日爲王却之。時老君適至。坐於樹下。觀諸魔師各作奇術。兩手作訣。山爲微動。老君知王可化。（中畧）令尹眞人遙以神通制之。山遂不動。（中畧）願聖者謂我除之。老君曰諾。（中畧）老君卽把九節之杖。撥而去之。如去塊土。（中畧）王叩頭再拜。求爲弟子。不復奉事魔師。舉國臣民。莫知敬仰。咸願皈依受化。（中畧）王益加信仰。（混元聖紀卷四）

○第三十八化（辯なし、ただし、卷二、第四十二化七項参照）

○第三十八化 游于闐 太上老君。於于闐國時。王子率國人迎於南渠山之上。造作精舍。太上曰。吾教汝依教律。

不得邪淫・飲酒・殺害。王更有餘教耶。太上曰。吾所行因機。教化盡入法門。如民不知罪福。卽以浮屠之法。制鍊身心。王曰善。太上令尹喜化作金人。身長丈六。項佩圓光。足踏蓮花。從空而下。禮拜老君。太上謂王曰。此吾弟子。爲汝等之師也。（現）

○遂至于闐國。于闐先聞老君將至。卽率國奉迎。於國南渠山之上。營造精舍。延請老君居焉。（中畧）王與近臣。朝夕諮問求乞所聞。老君授以齋戒之法。王曰（中畧）還更有餘教耶。老君曰。吾道無量無邊。順俗通時。因機立化。（中畧）汝國人積生剛勁。宜以浮屠之法。制鍊身心。（混元聖紀卷四）

○第三十九化（辯なし、ただし卷二、第四十二化八項参照）

○第三十九化 留神鉢 太上老君。告諸喪門。吾有神鉢。常得法味。使神氣和平。命飛天神人。以鉢置空中。爲其守護。此鉢名多羅。號三滿多。清靜者能覩。輕慢者不見。（現）

○第四十化（辯なし、ただし卷二、第四十二化九項および十項参照）

○第四十化 化諸國 太上老君。降伏外道。身放九色神光。通照四方諸國。光所極處。得與所來者八十餘國。王及后妃眷屬。盡來集會聽法。太上曰。吾欲汝等禁戒殺害之心。卽令吾弟子尹喜爲佛。與汝等爲師。喜身放金光。面東而坐。太上留鉢盂而昇天矣。（現）

○老君行化。至于闐闐國。卽放九色神光。徧照西方塵沙國界。光所及處。無有遠近。(中畧)如是八十餘國王及其妃后與諸眷屬。圍遶瞻仰。願聽法音。老君告諸胡王。(中畧)一切萬有。非實屠者。勿復割害生靈。(中畧)是我第一弟子無上真人尹喜。與汝爲師。身作金色。(中畧)面常東嚮。示不忘本。(猶龍傳卷四、流沙化八十一國九十六種外道)

○第四十一化(辯なし、ただし卷二、第四十二化十一項参照)

○第四十一化 到天竺 太上老君。先於忤嶺降太毒龍已矣。南至烏菴。遍歷五天竺國。迎太上於嚧闍山獨樹下。化玉座與王說浮屠。成律度喪門。立佛法。(現)

○第四十二化云。老子入摩竭國。現希有相。以化其王。立浮圖教。名清淨佛。號末摩尼。

至舍衛國。自化作神。從天而降。天人侍衛。現身長百千萬丈。

又至罽賓。降胡王及王子。火不能燒。鏝不能煮。水不能溺。胡兵百萬。弓矢劍戟。一時摧落。飛電八衝。聲如霹靂。人馬驚仆。北郭先生空中頌讚。

又至條支國。手撥大山。

至拘薩羅。降伏九十六種外道。

至迦夷羅國。左手把日。右手把月。藏於頭中。天地冥暗。山飛石裂。海水逆流。山川空行。

又至于闐闐南渠山示教胡王。令尹喜化作金人。身長丈六。項佩圓光。足踏蓮華。從空而下拜禮。老君謂胡王曰。此吾弟子。與汝爲師。

又留神鉢。令得法味。

又於毘摩城。地變金色。放九色神光。徧照塵沙國土。卽有赤靈真人・中黃丈人・太一真人・九宮六丁・八卦神

君・青龍・白虎・散華玉女。浮雲而至。老君坐七寶座。燒百和香。奏鈞天樂。

又有八十餘國。諸王妃后。皆來聽法。留尹喜作佛。及鉢於毘摩城。却昇天去。

老君又於葱嶺降大毒龍。徧歷五天。於耆闍山獨木樹下化玉座。與王說浮圖。度桑門二千五百人。受以戒律。(辯二)

○第四十二化 入摩竭 太上老君。入摩竭國。現希有相。手執空壺。以化其王。立浮屠教。名清靜佛。號末摩尼。

令彼刹利婆羅門等奉行。(現)

○第四十三化 (辯、第三十四化二項および第四十二化二項參照)

○第四十三化 舍衛國 太上老君。於舍衛國。自化作佛。從天而降。天人侍衛。到其宮中。坐七寶座。王與群臣。

繞佛瞻仰。其身長百千萬丈。徧滿虛空。(現)

○第四十四化 (辯なし)

○第四十四化 賜丹方 杜冲子玄逸。學道祈眞。靜神守一。感展真人降九華丹方。告曰。太上老君。於東海外亭山。

召集群眞。有地官舉子。故勅我付子仙方。(現)

○(杜)冲。字玄逸。閑居幽室。吟詠道德。(中畧)忽展真人降其靖室。(中畧)授以九華丹經一函。謂冲曰。老君與

文始先生。於東海八滄山召大帝。校集群仙。(中畧)時有地司保舉子勤勞。老君勅我付汝仙方也。(混元聖紀卷五)

○嵩山杜沖。字玄逸。年二十五。學道祈眞。靜神守一。二十餘載。感展眞人降授九華丹方。告曰。老君與尹眞人。於東海八滄山召太帝。集群眞。有地司舉子之勤。故勅我付爾仙方。(仙苑編珠卷下、杜沖九華の條)⁽¹⁷⁾

○第四十五化(辯なし、ただし第三十四化三項参照)

○第四十五化 弘釋教 太上老君。將欲再弘浮屠教法。以周莊王九年。乃於梵天。命煩陁王。乘月精騎白象。託摩

天竺國摩耶夫人。爲淨梵王之子。至十年甲午四月初八日。生於右脇。(現)

○老君。自與群胡辭決。已逾百年。煩陀王昔謂賓胡王也下生身毒國。爲王子。是謂浮屠教主。實莊王九年癸巳四月七日夜半。從莫耶夫人右脇誕生。(混元聖紀卷五)

○第四十六化(辯なし)

○第四十六化 授眞經 太上老君。降於樓觀授道士宋倫。中景之道。通眞之經。并靈飛六甲素奏丹符。至景王時。

太上遣仙官下迎受書。爲太清眞人。下司中嶽嵩山神仙之錄。(現)

○厲王二十一年庚子。老君降于樓觀。授道士宋倫。以中景之道。通眞之經。并靈飛六甲素奏丹符。(太上老君年譜要畧)⁽¹⁸⁾

○太清眞人宋倫。(中畧)棲止樓觀。(中畧)老君(中畧)乃告倫曰。吾有景中之道・通眞之經。(中畧)出靈飛六甲素奏丹符。以付於倫。(中畧)以宣王三十二年丁巳七月。太上遣仙官下迎授書。爲太清眞人。下司中嶽嵩高山神仙之錄焉。(歷世眞仙體道通鑑卷九、宋倫の條)⁽¹⁹⁾

○厲王二十一年甲辰。洛陽人宋倫。棲止樓觀。(中畧)一日老君降其居(中畧)乃告倫曰。吾有中景之道・通眞之經。

(中略) 出靈飛六甲素奏丹符。以付於倫。(中略) 以景王時。授書爲太清真人。下司中嶽神仙之錄焉。(混元聖紀卷五)

○第四十七化 (辯なし)

○第四十七化 嘆猶龍 孔子。與南宮敬叔見老君。歸謂弟子曰。鳥吾能知其飛。魚吾能知其游。獸吾能知其走。走者可以爲網。游者可以爲綸。飛者可以爲繒。至於龍。吾不能知。其乘風雲而上天。吾見老子。其猶龍耶。(現)

○孔子謂南宮敬叔曰。(中略) 孔子去。謂弟子曰。鳥吾知其能飛。魚吾知其能游。獸吾知其能走。走者可以爲網。游者可以爲綸。飛者可以爲繒。至其龍。吾不能知。其乘風雲而上天。吾今日見老子。其猶龍耶。(猶龍傳卷四、孔子問禮)⁽²⁰⁾

○第四十八化云。商太宰問夫子曰。夫子聖人歟。孔子對曰。聖則丘何敢焉。然則丘博學多識者也。太宰曰。三王聖者歟。孔子曰。三王善任智勇者。聖則丘弗知。太宰曰。五帝聖者歟。孔子曰。五帝善任仁義者。聖則丘弗知。太宰曰。三皇聖者歟。孔子曰。三皇善任因時者。聖則丘弗知。太宰大駭曰。然則孰者爲聖。孔子動容有間。曰。丘聞西方之人有聖者焉。不治而不亂。不言而自信。不化而自行。蕩蕩乎。民無能名焉。丘疑其爲聖人也。史志經云。孔子在魯。老子在周。以魯望周之洛陽。故在西方。蓋指老子爲西方聖人也。孔子問禮之時。先有猶龍之歎。故此指老子也。(辯二)

○第四十八化 揚聖德 商太宰問孔子曰。丘聖歟。曰博學者。又問三王。善任智勇者。五帝。善任仁義者。太宰大駭曰。孰爲聖歟。孔子曰。西方之人。有聖者焉。不治而不亂。不言而信。不行而至。時孔子在魯。兗州是也。老

君在周。洛陽是也。兼先有猶龍之嘆。有聖德者。老君是也。(現)

○商太宰見孔子曰。丘聖者歟。孔子曰。聖則丘何敢。然則丘博學多識者也。商太宰曰。三王聖者歟。孔子曰。三王善任智勇者。聖則丘不知。曰五帝聖者歟。孔子曰。善任仁義者。聖則丘弗知。曰三皇聖者歟。孔子曰。三皇善任因時者。聖則丘弗知。商太宰大駭曰。然則孰者爲聖。孔子動容有間。曰西方之人。有聖者焉。不治而不亂。不言而自信。不化而自行。蕩蕩乎。民無能名焉。所謂聖者老聃是也。(猶龍傳卷四、孔子問禮²¹)

○第四十九化(辯なし)

○第四十九化 胤四眞 太上之道。理身理國。四眞奉兮莫違。不忤不求。百代宗兮靡改。四眞者。莊周・列禦寇・庚桑楚・辛研。廼太上弟子也。(現)

○第五十化(辯なし)

○第五十化 教衛生 南榮趯見庚桑子。庚桑子曰。奔蜂不能化藿蠋。越雞不能伏鵠卵。魯雞故能之矣。雞之與雞。有能與不能者。其材故有巨細也。吾材小。不足以化子。子胡不南見老子耶。南榮趯贏糧。七日七夜。至老子之所。而問道焉。老子教以衛生之經。(現)

○南榮趯問曰。(中略) 庚桑子辭盡曰。奔蜂不能化藿蠋。越雞不能伏鵠卵。魯雞固能矣。雞之與雞。其德非不同也。有能與不能者。其材有巨細也。今吾材不足以化子。子胡不南見老子耶。南榮趯乃贏糧。七日七夜。至老君所。(中略) 是衛生之經也。(混元聖紀卷六)

○初(南榮) 楚師庚桑子。子曰吾才小。不足以化子。子胡不南見老子。故楚見老子。曰願因楚而問之。(玄品錄卷一)⁽²²⁾

○第五十一化(辯なし)

○第五十一化 訓陽子 陽子居南之沛。老子游秦至梁。遇陽子。老子仰天嘆曰。始以汝爲可教。今不可教。陽子不荅。至舍進與激^{澹中櫛}申擲脫履戶外。請問其過。老子曰而睢睢而盱盱。而誰與。太白若辱。盛德若不足。陽子蹇然變容曰。敬聞命矣。(現)

○老君。西遊於秦。陽子居邀於郊至梁而遇老君。老君中道仰天而歎曰。始以汝爲可教。今不可教也。陽子居不荅。至舍進盥澹中櫛。脫履戶外。膝行而前曰。向者大人仰天而嘆。弟子欲請問。(中畧)老君曰。睢睢盱盱而誰與居。大白若辱。盛德若不足。陽子居蹇然變容曰。聞命矣。(混元聖紀卷六)

○第五十二化(辯なし)

○第五十二化 天地數 太上老君。居景室山。與五老帝君共談天地之數。撰集經書。有浮提國二神人。出金壺中墨汁。以寫之。及汁盡。乃剝心瀝血。以代墨汁。(現)

○王嘉拾遺記云。昔老君居景室山。與老叟五人共談天地之數。撰經書。垂十萬言。有浮提國二神人。出金壺器中有墨汁。(中畧)以寫之。及金壺汁盡。二人乃欲剝心瀝血以代墨焉。五老即五天帝釋也。景室即太室山也。(混元聖紀卷六所引)

○第五十三化（辯なし）

○第五十三化 詔沈羲 沈羲吳人也。學道蜀中。周赧王時。羲路逢三仙官。駕白鹿車・青龍車・白虎車。從者告羲曰。太上老君遣吾。持節以白玉版。青玉字。授羲。迎而昇天。（現）

○赧王十年丙辰。老君遣使召隱士沈羲。羲本吳郡人。學道於西蜀。（中畧）路逢龍車・虎車・白鹿車各一乘。導從甚衆。皆朱衣杖節。問羲曰。（中畧）須臾。三仙羽衣持節。以白玉冊・青玉界・丹玉字授羲（中畧）遂載羲升天。（混元聖紀卷六）

○第五十四化（辯なし）

○第五十四化 解道德 漢文帝讀五千文。數事莫通。太上老君寄跡陝河之濱。帝使使問羲。太上曰。道尊德貴。非可遙問。帝親詣。太上不起。帝曰普天之下。莫非王土。子雖有道。朕民也。太上拊掌躍身升空。答曰。余上不在天。中不累人。下不居地。何民之比。帝乃悟知是神人。告而求教。（現）

○（孝文）帝讀五千言。而有所未曉。混元乃化身。示跡號河上公。居陝河之濱。（中畧）帝遣使問其義。公曰道尊德貴。非可遙問。帝即命駕詣之。公踞菴中不起。帝謂曰。普天之下莫非王土。率土之賓莫非王臣。子雖有道猶朕民也。（中畧）公拊掌跳躍。冉冉升虛。去地數丈而止於太虛。俛而答曰。余上不至天。中不累人。下不居地。何民之有。陛下焉能令余富貴貧賤乎。帝乃悟以其神人。方下輦稽首禮謝。因授帝上下章句。希微之旨。（猶龍傳卷四、號河上公²³）

○第五十五化（辯なし）

○第五十五化 授道像 太上老君。先於黃帝・穆王。命王母。持天尊道君像。又以漢武帝好道。遣九天侍郎東方朔輔之。太始元年秋。承華殿見一青禽。帝問。朔答曰。王母使者。暮必降矣。王母果至。帝拜延坐。請不死之藥。曰未可。乃令上元夫人賜帝白銀像五軀。乃太上老君之像。又出桃七枚。母噉其二。五賜其帝。（現）

○至孝武帝好神仙之道。太上遣九天侍郎東方朔。以輔之。又遣西王母・上元夫人。賜帝白銀像五軀。謂帝曰。此則太上老君之像也。（猶龍傳卷四、號河上公）

○（西王母が武帝に對面し）又命侍女。取桃玉盤盛七枚。（中畧）四以與帝。母自食三。（歷世眞仙體道通鑑後集卷一、金母元君）

○漢元封元年。降武帝殿。母進蟠桃七枚於帝。自食其二。（列仙全傳卷一、西王母）

○第五十六化（辯なし）

○第五十六化 游瑯琊 漢成帝時。太上老君。下游瑯琊郡曲陽泉上。授于吉太平經一百七十卷。至後漢章帝時。復降吉。年一百八十歲。受以戒律一百八十卷。（現）

○在孝成帝河平二年。混元分身下游瑯琊郡曲陽泉。授北海人于吉太平經一百七十卷。（中畧）孝章帝元和二年。太上復過瑯琊。授吉一百八十戒。（猶龍傳卷四、授于吉太平經）

○孝成皇帝河平二年甲午。老君化身下降。遊于瑯琊郡曲陽淵。時北海人干室。後改名吉。（中畧）號太平青領書。以授吉曰。此太上老君太平經也。（中畧）遂編前經成一百七十卷。（中畧）後漢章帝元和二年。老君復降詰責吉。（中畧）

乃爲說一百八十戒訖。(混元聖紀卷七)

○第五十七化(辯なし)

○第五十七化 授簿書 漢安帝永初三年己酉。太上老君降於泰山。召江夏吏劉圖。校定天下簿籍。因示圖。地獄・天堂・罪福報應事。令告示道俗。授圖除罪解過文。(現)

○安帝永初三年己酉二月。老君降于泰山。遣泰山使者雅羽。以車騎召江夏善士劉圖。欲使校定天下簿籍。(中畧)老君欲示圖以罪福報應。(中畧)圖因此得道。(混元聖紀卷七)

○第五十八化(辯なし)

○第五十八化 傳正一 張天師。名道陵。沛人也。居蜀鶴鳴山。至順帝漢安二年夏。或有二使者降言。太上老君至。語道陵曰。子宿應仙道。六天魔鬼害人。吾以斬邪神劍。都功重職。正一明感之法授子。爲吾清蕩凶妖。復立諸化。言訖。太上還空而去。(現)

○順帝壬午歲正月十五夜。真人在鶴鳴山。(中畧)車前一人。勅真人曰。子勿驚怖。卽太上老君也。真人禮拜。老君曰。近蜀中有六大鬼神。枉暴生民。深可痛惜。子其爲吾治之。(中畧)乃授以正一盟威秘籙・三清紫經(中畧)雌雄劍二把・都功印一枚。(列仙全傳卷三、張道陵²⁴)

○第五十九化(辯なし)

老子八十一化圖說について

○第五十九化 說斗經 漢桓帝永壽元年正月七日。太上老君乘白鹿。降於成都太昊玉女修丹之所。地湧玉局。太上與天師說北斗經。十五日。復說南斗經。(現)

○太上駕龍車。天師乘白鶴。頓下五雲。至太昊玉女修大丹之所。感地祇湧玉局。座高丈餘。(中畧)爲說北斗七元經・削死延生之法。是歲漢桓帝永壽元年乙未正月七日也。至上元之辰。老君復爲天師說南斗六司延壽度人妙經。(猶龍傳卷五、度漢天師)

○永壽元年乙未歲正月七日。老君再降。命陵同遊成都。老君駕龍車。陵乘白鶴。頓下五雲。至太昊玉女修丹之所。地祇湧出同捧一玉局。(中畧)爲說北斗削死注生之法。至十五日。又說南斗陶魂鑄魄之功。(混元聖紀卷七)

○第六十化 (辯なし)

○第六十化 教飛昇 李真多。乃李八百妹也。於錦行山錦竹山修道。感太上老君與玄古三師。降漢州萬安山。授真多飛昇之道。真多行之。先昇於李八百矣。(現)

○李真多。仙人李八百之妹也。隨兄修道。居綿竹中。老君。與玄古三師降。授以飛昇之道。先於八百。白日昇天。(歷世真仙體道通鑑後集卷二、李真多)

○第六十一化 (辯なし)

○第六十一化 授三洞 漢靈帝光和二年正月七日。太上老君與太極真人。降天臺山。授葛玄靈寶等經・大洞經。及上清齋法。(現)

○孝靈帝光和二年己未正月七日。混元與太極真人。降於天臺山。授仙人葛孝先靈寶等經三十六卷。(中畧)出洞元大洞等經三十六卷。以授于孝先。及上清齋。(猶龍傳卷五、授葛仙公齋法)

○靈帝光和二年己未正月朔旦。老君敕太極真人(中畧)同降於天臺山。(中畧)出洞玄大洞靈寶經凡三十六部。以授仙人葛玄。及上清齋法二等。(混元聖紀卷七)

○第六十二化(辯なし)

○第六十二化 拯民災 道士王纂。居馬迹山。值晉亂。遂飛章告天。後感太上老君。自西北來降。語纂曰。子憫生民。飛章奏天。今以神化・神呪二經授子。可拯民於災難耳。(現)

○道士王纂。(中畧)居馬跡山。(中畧)值西晉末中原亂離。(中畧)民多斃無救。纂憫之。遂於靜室飛章告天。後(中畧)自西北至(中畧)一人佩劍持簡而前。告纂曰。太上道君至。(中畧)道君曰。子憫生民形于章奏。(中畧)今以昔於杜陽宮所授眞唐平神化・神呪二經。復授子。行之可拯萬民。(歷世眞仙體道通鑑卷二八、王纂⁽²⁵⁾)

○第六十三化(辯なし)

○第六十三化 授神丹 神仙傳。王若冲。琅琊人也。世居竹山。常以濟物爲意。一旦有異人。來其家。言曰。子早樂仙道。陰功及物。已著仙籍。太上命我授子神丹。若冲服之。後忽見雲鶴滿空來迎。登雲昇天而去。(現⁽²⁶⁾)

○第六十四化(辯なし)

○第六十四化 封寇謙 寇謙之。居嵩山。後魏時神瑞二年乙卯四月一日。有二神。乘龍告曰。太上老君至。授謙之新科經戒符籙・仙冕・天衣・天果。太武聞之。迎至閣。問道。後改年號太平眞君元年。授帝符籙。(現)

○後魏明元帝神瑞二年乙卯四月一日。(中畧)有二神人。(中畧)乘龍持節。告謙之曰。太上老君至矣。(中畧)乃賜謙之經戒九卷。(中畧)又賜謙之新科符籙十餘卷。(中畧)仙冕・天衣及太平眞君之號。并天果六枚。(中畧)太武帝命有司。爰弊帛以祭(中畧)。可改元爲太平眞君元年。大赦天下。太武受符籙。(猶龍傳卷五、賜大魏太平眞君之號⁽²⁷⁾)

○第六十五化 (辯なし)

○第六十五化 建安化 唐武德二年。太上老君降晉州浮山縣羊角山。語吉善行曰。言與唐天子。汝今得聖理。社稷延長。宜於長安東。置安化宮。言訖騰空而去。(現)

○高祖武德元年。老君見晉州浮山縣羊角山。告吉善行。(中畧)謂善行曰。與我語大唐天子。汝今得聖理。社稷延長。宜於長安城東。置一安化宮。(中畧)言訖。乃騰空而去。(猶龍傳卷五、大唐聖祖)

○唐高祖武德元年戊寅二年己卯。老君降于羊角山。語吉善行。令奏聞云。我帝祖也。今得聖治。社稷延長。(太上混元老子史畧卷上)

○又六十六化云。于闐國毘摩城伽藍。是老君化胡成佛之處。中有石幢。刻記其事。云。東方聖人。號老君。來化我國。下引八學士議。證其事跡。(辯二)

○第六十六化 毘摩銘 于闐國毗摩城伽藍。乃太上老君化胡成佛之所。中有石幢。是羅漢盧旃所造。銘曰東方聖人。特號老君。來化我國。咸作佛國。其銘尚在。(現)

○皇朝實錄云。于闐國西五百里。有毗摩伽藍。是老子化胡之所建。老子至是白日昇天。(混元聖紀卷八)

○第六十七化(辯なし)

○第六十七化 光醮壇 高宗詔朔二年^{龍力}春。令道士郭行眞等。北邙觀設醮。有白光遍殿照壇。太上老君現於光中。又

於儀鳳四年。遣道士鄭玄隱等^{再力}拜醮。太上重現於壇上。(現)

○高宗龍朔二年二月。(中畧)道士郭行眞(中畧)等。以其年二月二十七日夜。建道場。慶讚設醮。纔訖。有白光。徧殿兼照層壇。老君現於光中。(中畧)儀鳳四年四月四日。勅遣道士鄭元隱。於北邙山廟所。與道士羅務光等二十四人行道。(中畧)於壇西。見老君(中畧)空中降下壇上。(猶龍傳卷五、大唐聖祖)

○第六十八化(辯なし)

○第六十八化 黃天原 道士鄔元崇。文明元年春。北邙設醮。太上老君現。汝二月十八日。於虢州皇天原。吾有語^{士力}道上。奏勅資香同縣令等往祁。太上果至。語道士曰。吾是汝帝之祖。國祚延長。言畢昇天。(現)

○文明元年甲申。天后臨朝。欲王諸武。老君以其年二月十八日。降現於虢州(中畧)皇天原。遣(中畧)鄔元崇。傳言於天后。說國家祚永而享太平。(猶龍傳卷五、大唐聖祖)

○則天文明元年甲申。廢中宗爲廬陵王。欲王諸武。二月十八日豫章人鄔元崇(中畧)至虢州(中畧)皇天原。(中畧)

太上老君來。欲與君語。言訖而過。(中畧)我是太上老君。汝帝之元祖。(中畧)老君令傳言天后。說我國家曆數綿遠。不得輒立異姓。(混元聖紀卷八)

○第六十九化(辯なし)

○第六十九化 新興寺 唐開元十七年四月十五日。太上先於蜀州新津縣新興尼寺佛殿柱上。自然隱。起木紋。爲一太上老君聖像。頂上有華蓋。雲葉・天花十三處。奉詔迎柱入內。於大同殿供奉。(現)

○開元十七年己巳四月十五日。(中畧)大聖祖眞元皇帝。應現於當管蜀州新津縣新興尼寺佛殿柱上。自然隱。起木文。爲一老君聖像。當頂上有華蓋。足下前後左右各有雲葉天花一十三處。(中畧)宣取像柱入內。於大同殿供養。(猶龍傳卷五、大唐聖祖)

○十七年四月八日(中畧)當管蜀州新津縣新興尼寺佛殿柱上。自然木文。隱起爲一老君聖像。頂上有華蓋。足下前後各有雲葉天花一十三處。(中畧)就蜀迎取像柱。令作寶輿。立安至京。就大同殿禮謁三日大齋。(混元聖紀卷八)

○第七十化(辯なし)

○第七十化 彰靈寶 唐開元二十九年。參軍月同秀^{田カ}。於丹鳳門西北。見太上老君坐白馬。二童子語曰。西與尹喜入流沙日。藏一金匱。在函關故墟。求之穿。獲石函。上有千載天寶靈符六字。內有金匱靈符。(現)

○二十九年正月七日。陳王府參軍田同秀。於丹鳳門外。(中畧)又見混元乘白馬。侍從二人童子二人。謂同秀曰。我昔與尹喜將入流沙之日。藏一金匱靈符。在桃林故關尹喜舊宅。汝可請帝取之。(中畧)故函谷關墟求訪之。(中畧)

遂穿掘下至水際。得石函金匱。玉版朱書細篆。(中畧)其後三年。帝見靈符有天寶千載之字。(猶龍傳卷五、大唐聖祖⁽²⁹⁾)

○第七十一化 (辯なし)

○第七十一化 應帝夢 唐天寶元年。夢太上老君說曰。吾在城西南久矣。當與汝與慶相見。帝差道士蕭元裕與內使。尋至樓觀山谷間。白光下得玉像老君。高三尺。以進。其日上在興慶宮。躬自迎謁。果符與慶之言。(現)

○其年 (天寶元年) 閏四月庚子。帝夢混元謂曰。我在城之西南久矣。當與汝於興慶相見。可速迎我。(中畧)遂差內使與道門威儀蕭元裕。於城西南尋訪。數日。忽於樓觀山谷間。(中畧)於其下穿得玉像老君。高三尺餘。以進。其日上在興慶宮大同殿。躬自迎謁。果符與慶之言。(猶龍傳卷五、大唐聖祖)

○第七十二化 (辯なし)

○第七十二化 傳丹訣 唐明王妹好道。天寶中。勅公主投龍於中條山雷公洞井。因居山感天書掛樹。甘露盈庭。忽夜有青衣。語曰。太上老君降授公主鍊丹訣。(現)⁽³⁰⁾

○第七十三化 (辯なし)

○第七十三化 現朝元 唐天寶五年冬。帝幸華清宮。見驪山上祥雲。擁太上老君於朝元閣上。帝與內人。瞻謁良久乃隱。因下詔。更名朝元閣。爲降聖閣。(現)

○其年 (天寶五載) 十二月戊戌。帝幸華清宮。(中畧)忽見驪山頂。祥雲擁蔽。須臾漸散。見混元聖祖現於朝元閣上。

帝與內人瞻謁良久。乃隱。詔（中畧）改朝元閣爲降聖閣。（猶龍傳卷五、大唐聖祖）

○十二月戊戌。帝幸華清宮。忽見老君現於朝元閣上。移刻不見。遂改朝元閣爲降聖閣。（混元聖紀卷九）

○第七十四化（辯なし）

○第七十四化 頒流霞 女冠王法進。劍州臨津縣人也。幼好道。有女冠。過其家。父母以法進好道。託女冠保護之。授與正一延生籙。遂名法進。一日有青衣。降曰。太上老君爲汝夙稟仙骨。令召上朝玉京。隨青童昇。太上賜以玉杯霞漿。飲之。使歸。後於天寶壬辰。雲鶴迎之昇天。（現）

○王法進。劍州臨津縣人也。孩孺之時自然好道。（中畧）有女冠（中畧）過其家。父母以其慕道。託女冠以保護之。與受正一延生籙。因名曰法進。（中畧）忽有二青童。降于其庭。宣上帝之命曰。以汝宿稟仙骨。（中畧）今以青童召汝。受事於玉京也。法進卽隨青童騰身。（中畧）帝命以玉杯霞漿賜之。飲訖。（中畧）命青童送還其家。（中畧）法進以唐玄宗天寶十一載壬辰歲。雲鶴迎之而昇天。（歷世真仙道鑑後集卷四、王法進）

○忽有二青童。降于劍州女冠王法進之庭。謂曰。大帝以汝夙稟仙骨。志不忘道。敕我迎汝受事於上京也。法進不覺騰身凌虛。逕達帝所。（中畧）老君命以霞漿賜之。（中畧）遣還。（中畧）法進以十二載復昇天。（混元聖紀卷九）

○王法進者。劍州臨津人也。幼而好道。（中畧）有女冠。（中畧）過其家。父母以其慕道。託女冠以保護之。與授正一延生小籙。名曰法進。（中畧）忽三青童降於其庭。謂法進曰。上帝以汝夙稟仙骨。（中畧）敕我迎汝受事於上京也。不覺騰空。逕達大帝之所。命以玉盃霞漿賜之。（中畧）今且令汝下歸於世。（中畧）法進。以天寶十二年壬辰遂復昇天。（太平廣記卷五三所引仙傳拾遺、王法進）

○第七十五化（辯なし）

○第七十五化 刻三泉 唐天寶十五年。帝幸蜀。太上老君現於漢中郡三泉黑水之側。帝禮謁。遂命刻石於所現之處。
（現）

○十載。帝幸蜀。混元現於漢中郡三泉黑水之側。帝禮謁。遂命刻石像眞容於所現之處。（猶龍傳卷六、大唐聖祖下）
○十五載。帝幸蜀。玄元見於漢中郡三泉縣黑水之側。帝親禮謁。遂命刻石像眞容於所在之處。（混元聖紀卷九）

○第七十六化（辯なし）

○第七十六化 雲龍巖 肅宗至德二年三月。太上老君現於通化群雲龍岩。見混元眞像。立於山前。自地接天。通身白衣。左手垂。右手執五明扇。儀相炳然。衆盡瞻禮。其山雖高。亦不及肘。良久乃隱。（現）

○肅宗至德二載丁酉三月十八日。混元現於通化郡雲龍巖。（中畧）見混元眞像。立於山前。自地接天。通身白衣。左手垂下。右手執五明之扇。儀相炳然。衆盡瞻禮。其山雖高。亦不及肘。良久乃隱。（猶龍傳卷六、大唐聖祖下）

○第七十七化（辯なし）

○第七十七化 居玉堂 謝自然。華陽女官也。好道。居果州金泉山。感太上老君。潛使金母。授法錄鍊氣之術。功成。以貞元十四年昇天。後三月乃歸。語刺史李堅曰。天上有玉堂。太上所居。壁間題仙名。下注云。在人間。或爲帝王。或爲宰輔者。神仙朝拜老君。皆四焉。拜欠言訖卽昇天。（現）

○謝自然。蜀華陽女眞也。（中畧）幼而入道。（中畧）於果州南充縣金泉山修道。功成。唐德宗貞元十年甲戌十月十六

日。老君命召之。白日飛昇。(中畧)上昇後三日。再自天降。謂刺史李堅曰。天上有玉堂最高。老君居焉。(中畧)壁上皆金題神仙之名。時有朱書。注其下云。降世爲帝王。或爲宰輔。凡神仙謁見老君皆四拜焉。(中畧)語訖遂即昇天。(歷世眞仙體道通鑑後集卷五、謝自然)

○德宗貞元十年。混元潛使金母。果降於果州金泉山。授鍊炁之術。付女冠謝自然。修習功成。以其年十月十六日白日上昇。後三月乃歸。謂刺史李堅曰。天上有玉堂最高。老君居焉。壁上皆題神仙之名。注脚下云。在人間或爲帝王。或爲宰輔。神仙入謁老君。皆四拜焉。自然言訖。遂却昇天。(猶龍傳卷六、大唐聖祖下)

○德宗貞元十年甲戌十月十六日。果州南充縣金泉山女冠謝自然。修道功成。老君命召之。白日上昇。後三月。再自天降。謂刺史李堅曰。天上有玉堂最高。老君居焉。白玉爲壁。上皆金。題神仙之名。時有朱書注其下云。降世爲帝王。或爲宰輔。凡神仙入謁見老君。皆四拜焉。(中畧)言訖遂即昇天。(混元聖紀卷九)

○第七十八化 (辯なし)

○第七十八化 明崖壁 文宗開成二年。閬州刺史高元裕。於州北嘉陵江上。山之前。見崖壁間光起。視之石上有自然紋。成太上老君像。無不周備。傍有一人捧爐熱香。後一童子。皆非人力圖繪鐫刻所及。每祈禱即紫雲上浮。

(現)

○文宗開成二年丁巳五月。(中畧)高元裕爲閬州刺史。於州北(中畧)嘉陵江上。小山之前。忽見崖壁間光彩有異。近而觀之。石上有自然石文。成老君眞像。(中畧)無不周備。旁有一人(中畧)持爐薦香。後一人童子。(中畧)皆非人力圖繪鐫刻所及。元裕每有所禱。即紫炁上浮。(猶龍傳卷六、大唐聖祖下)

○開成二年丁巳五月。(中畧) 高元裕爲閩州刺史。於州北九里嘉陵江上。小山之前。忽有崖壁間光彩有異。近而觀之。石上有自然文。成老君之像。(中畧) 無不周備。傍有一人(中畧) 持爐薦香。後一童子(中畧) 皆非人力圖繪鐫刻所及。元裕每有所禱。卽紫炁上浮。(混元聖紀卷九)

○第七十九化(辯なし)

○第七十九化 殄龐勛 唐懿宗咸通中。徐州龐勛爲寇。欲焚亳州太清宮。百姓見。太上老君自宮出而南。須臾黑霧遍野。群寇迷路。自相殺戮。^{殺力}勛溺水而死。(現)

○懿宗咸通十年己丑九月十日。徐州逆寇龐勛(中畧) 寇亳州太清宮。其日宮北百姓三百餘人。見老君自宮中乘空而南。須臾黑霧遍南。川中群賊迷路自相殺戮。龐勛溺水而死。(猶龍傳卷六、大唐聖祖下)

○懿宗咸通十年己丑。龐勛領三千餘人。欲奪太清宮。(中畧) 咸見老君乘空而騰。須臾黑霧昏曉。賊黨迷路。自相蹂踐。龐勛亦溺水死。(太上混元老子史畧卷上)

○(咸通) 十年己丑九月。徐州賊龐勛來寇亳。(中畧) 趨太清宮。(中畧) 忽望見老君自宮中乘空而南。須臾黑氣自九井中出。良久昏曉一川。賊黨迷路。自相蹂踐。龐勛溺水而死。(混元聖紀卷九)

○第八十化(辯なし)

○第八十化 傳古磚 唐僖宗中和二年。宗室李特立。與道士李無爲於成都青羊肆玄中觀設醮。見紅光。遂穿地得寶磚。上有古篆六字云。太上平和災。其字方二寸。(現)

○其年（中和二年）八月二十九日戊辰夜。宗室李特立。與道士李無爲於成都府青羊肆元中觀（中畧）設醮祈眞。忽見紅光。（中畧）遂穿地三尺許得寶璽一。（中畧）有古篆六字。各方二寸。（中畧）文曰太上平中和災。（猶龍傳卷六、大唐聖祖下）

○（中和二年）八月二十九日戊辰。宗室李特立。命道士李無爲。於成都青羊肆玄中觀設醮。忽見紅光。（中畧）遂穿其地（中畧）乃得璽一。（中畧）有古篆六字。各方二寸。（中畧）其文曰太上平中和災。（混元聖紀卷九）

○第八十一化（辯なし）

○第八十一化 起祥光 紹聖五年正月十八日。亳州太清宮道士張景元等。夜朝禮。共見太上老君眉間起紅光。上連霄漢。自南至北。入洞霄宮先天聖母殿。左右爛若紅霞。中一道如鍊^{練力}。且若虹橋。更後收西北。（現）

○哲宗皇帝紹聖五年戊寅二月十五日夜。亳州太清宮道衆朝禮次。見老君像兩眉間。紅光浮浮而出。漸照滿殿。通徹瓦屋。上連霄漢。入洞霄宮先天大聖后殿逡巡。光定。左右二道。爛若紅霞。中間一道。皎如白練。輝華連屬。亘若虹橋。（中畧）至二更已後。光影浸移。尋入天門而去。（混元聖紀卷九）⁽³¹⁾

いまだに十分ひろくかつ丹念に關係資料に目を通したとはいえないために、まだかなり見落しが多いにちがいないけれども、以上が、一應いままでに私の検索することのできた資料によつて作つた對照表である。以下、この對照表に基いて、至元辯僞錄に引かれている李志常のつくらせたといわれている老子八十一化圖——以下、原八十一化圖と畧稱する——、福井本以下三種の現存本老子八十一化圖說——以下、現八十一化圖說と畧稱する——、およびその出典もしくは編纂の資料となつた文獻との關係について考えてみたい。まず、福井説からはじめる。

三 福井説について

つとに化胡經の問題について關心をもたれた福井康順博士は、その著「道教の基礎的研究」のなかで老子化胡經なる一章をもうけ、原八十一化圖と現八十一化圖説との關係にも言及している。⁽³²⁾ そうして、編者がともに令狐璋と史志經とされていること、書名がともに八十一化とされていること、明の朱睦㮮の萬卷堂書目卷三の道家の條に令狐璋の「八十二——二は一の誤り——化圖説四卷」、もしくは「金闕玄元圖説四卷」などと記されていることの三つの理由をまずあげたのち、兩書の第八化・第九化・第十九化・第三十化・第四十二化・第四十八化および第六十六化の七カ條の原文をかがけて比較し、原八十一化圖の文が長くて、現八十一化圖説の文が短いこと、前者には全文でないものもふくまれているであろうのに對して、後者はすべて全文であることなどから、現八十一化圖説は、原八十一化圖の抄本の形をなしていると推測する。以上の點については、私も原則的にはまったく同感である。福井本では、卷頭にかげられたいわゆる眞人圖のつぎの頁の冒頭に、「金闕玄元太上老君八十一化圖説卷第」という一段——福井博士はこれを「題簽らしいもの」という——が記されている。現存本では「卷第」で切れているけれども、原八十一化圖においては、必ずや「第」字下に「一」字が記されていたに相違なからうと思われる。ということは、原八十一化圖は現八十一化圖説のような一巻本ではなかったことを、いいかえれば、萬卷堂書目のように、果して四卷本であったか否かは明らかではないが、少なくとも二巻以上のものであったことを明瞭に物語る有力な證據となるであろう。そうして、萬卷堂書目に四卷とある以上、明代の通行本老子八十一化圖説は、あるいは四卷本であったかもしれず、それは、ひいては原八十一化圖が四卷本であった由を示めすことであるのかもしれない。

萬一、原八十一化圖が四卷本であつたとすれば、その圖の數は八一葉にすぎないのであるから、各圖に對する説明文が元來それぞれかなり長文でなければならなくなつてくるわけである。その各説明文がもととかなり長文であつたであろうことは、福井博士も注意しておられるように、原八十一化圖第六十六化の末尾の「下引八學士議。證其事跡」なる一句から、その八學士の議論が引用されていたらしいことによつても、推測されるであらう。その「八學士の議」とは、現在混元聖紀卷八に收められている、則天武后の萬歲通天元年（六九六）に上つた僧惠澄の化胡經排斥の言に反對した、劉如璿以下八名の人々の議論である。³³このように、至元辯僞錄の撰者があえて省畧し、もしくは要を摘んで記したと思われる例は、誇張していえば、枚舉にいとまがない。そのすべてをあげるわけにはいかないもので、ここにその一、二の例をあげてみよう。

原八十一化圖の第五化にいうとしてかかげられている天の名稱は、ほとんどが畧稱であり、説明は簡畧にすぎている。第十化にのべられている老子の誕生譚も、猶龍傳や混元聖紀などにみえるところと比べれば、かなり省畧されていることがわかる。老子が生れかわりつゝ、伏羲以來代々の帝師となつたという第十一化に記されている轉生説話も、きわめて簡畧である。しかし、對照表で示したように、同じく第十一化と題しながら、別の内容の文章が至元辯僞錄の卷一と卷二とに記されていることは、ひとつの化條の全文が現在至元辯僞錄に引かれているそれよりも長文であつたことを思わしめるのに十分である。ちなみに、至元辯僞錄卷一所引の第十一化の末尾に「周文王時。號燮邑子。云云」とあり、第十九化の冒頭にも同意の文のあることは、至元辯僞錄の撰者の引用の仕方の杜撰を示めす一例となつとも、各所引の化條が完全でないことをも示しているであらう。第三十化には、前掲のように、「坐蓮華上。說涅槃經」という一句がある。これに對して、その「辯言」のなかには、「坐蓮華上。說蓮華經」とのべられているから、

右の一句は、現八十一化圖説の第三十一化の後半と第三十二化の前後にあたる部分が脱落して、その前後を結びつけて釋祥邁が書き記した結果かもしれないと臆測される。他の例ははぶくが、これらわずか一、二の例示からだけでも、原八十一化圖の各化條が、現在至元辯僞錄に引用されているものよりも長文であつたことだけは、事實として認めなければならぬことが理解していただけたことと思う。

さらに、原八十一化圖の抄文とみても大過あるまいと思われるものに、前掲の對照表によつて明らかのように、第五化の前半、第六化の前半、第七化、第二十三化の前半の一部、第二十六化の一部の五カ條がある。現行の至元辯僞錄にひかれてゐる原八十一化圖の化條は、全八十一條の約四分の一に相當する二十カ條しかない。ただし、卷三には、さきの對照表にかかげたように、第二十四化に相當する——あるいは末尾の「使尹喜作佛以化胡人」なる一句のみは第三十四化にあたるのかもしれない——條がみえているから、これをいれれば二十一カ條（あるいは二十二カ條）となる。いづれにしても、至元辯僞錄に引用されている原八十一化圖の二十カ條か二十一カ條かの半數以上に相當する十二カ條が、原八十一化圖の抄本的性格をそなえているらしいのであるから、福井説は一應正しいといわなければならない。けれども、いま一段とくわしく比べてみると、必ずしもそのように斷定してしまうわけにはいかないように思われる。たとえば、現八十一化圖説の第一、第三、第十の四カ條は、その化題の條號こそ兩者同一ながら、そこに記されている内容は、無關係といつてもよいほどにまで異なっている。内容が異なっているという點からいえば、原八十一化圖の第十一化（至元辯僞錄卷二所掲分）、第十二化、第十三化も同様で、それに相當する文は、現八十一化圖説中のどこにもみいだされない。現八十一化圖説の撰者が省畧したといつてしまえばそれまでであるが、原八十一化圖には見當らない第十化を現八十一化圖説が収めているところと考えあわせてみると、いかにしても腑におちない。

出典すなわち資料の面からみると、表面上、原八十一化圖の抄本のように思われる現八十一化圖説の文が、私には實は他の資料によつたように考えられるものもあるのである。福井博士が原本の抄本という第八化にしながら、原八十一化圖よりも混元聖紀卷二の文に、より近いことが、さきの對照表によつて明らかであろう。このようなたぐいの文は、少なくない。第九化は原八十一化圖が猶龍傳に近いのに對して、現八十一化圖説のそれは猶龍傳と道德眞經廣聖義とから、第十九化は原八十一化圖が猶龍傳から、現八十一化圖説は混元聖紀と太上混元老子史畧とから、それぞれとつたように思われる。第三十化・第四十二化・第四十八化および第六十六化の四カ條は、ほぼ原八十一化圖によつたといつてもよいが、それでも混元聖紀や猶龍傳などによつて修正を施した感じを免れない。さらに、第五化は、原八十一化圖より猶龍傳の冒頭の部分に、第六化も同様に混元聖紀の冒頭部分に、第七化は原八十一化圖が猶龍傳に近いらしいのに對して、現八十一化圖説はむしろ混元聖紀に、それぞれ基づいているように思われる。これに對して、第二十三化は、原八十一化圖の文が大畧太上混元眞錄と鼎器歌からなっているのに、現八十一化圖説の直接的出典は不明である。同意の文は、古樓觀紫雲衍慶集、終南山說經臺歷代眞仙碑記などに收められている諸碑文などに數多くみえているけれども、⁽³⁴⁾ここにかかげられたような文章に酷似するものは、まだ殘念ながらみだしてはいない。そうして、それが嚴密ないみでは、原八十一化圖に基づいた文章といえないことは、兩者を比較すれば一讀して明瞭である。第二十六化は、むしろ原八十一化圖、猶龍傳、および混元聖紀の三者を合様してつくりあげたのではないかと思われる。

つぎに、兩者の内容の異なる化條の資料についてのべておこう。原八十一化圖の第一化は、雲笈七籤、道德眞經廣聖義が主な資料となつてゐるのに對して、現八十一化圖説では、むしろ雲笈七籤と猶龍傳、とくに後者に據つてゐる。

ようである。第二化は、原八十一化圖に錯雜があるのか第一化と同文が記されているのに對して、現八十一化圖說では、「不可測度」という雲笈七籤にみえる一句をのぞいて、他はほとんどすべて猶龍傳に従っている。現八十一化圖說の第三化は道德眞經廣聖義によっているのに對し、原八十一化圖の資料は、なお未檢出である。いまだに出典が未檢出なのは、このほかになお第十・第四十九・第六十三・第七十二の各化がある。さらに、原八十一化圖の第十一（ただし至元辯僞錄卷二所引文）・第十二・第十三の各化條の出典も不明ながら、現八十一化圖說の第十二化は猶龍傳と道德眞經廣聖義を、第十三化は猶龍傳、道德眞經廣聖義、および太上混元老子史畧を、それぞれ出典としているようである。

また、兩者の化條の内容こそほぼ類似しているとはいうものの、化條の號數のちがうものがある。現八十一化圖說の第十八化がそれで、原八十一化圖では至元辯僞錄卷二の第十化と同書卷三に無化題で「圖云」としてのせられている文、とくに後者に酷似している。そうして、後半の部分は、猶龍傳の相當記事と同じく、「玄中記所載」として出典を明記しているのかかわらず、原八十一化圖第十一化には單に「又云」とのみ記して「玄中記」の名がみえないから、現八十一化圖說は主として猶龍傳によっているのではないかと推測される。なお、後半の部分のうち一部分は、歷世眞仙體道通鑑後集によっているのかもしれない。これらの諸點はとにかくとして、原八十一化圖の第十化には「庚寅歲」と記されているのに對して、現八十一化圖說關係の資料とみなされるものにはすべて「庚申歲」とあるから、現八十一化圖說を原八十一化圖、というよりは至元辯僞錄所引本の單なる抄本というわけにはいかないであろう。その點に關連して、つぎに注目しなければならないのは、至元辯僞錄、もしくは原八十一化圖で一カ條にまどめてある化條が、現八十一化圖說では數カ條にわけて記述されていることである。すなわち、原八十一化圖の第十一化は、

現八十一化圖説の第十一、十三、第十五、第十七、および第十九の六カ條に——ただし、ここには前にも一言したように錯雑があり、原八十一化圖の第十一化の末尾と第十九化の一部とは重複し、かつ第十九化がさらに現八十一化圖説の第十九化と第二十化とにわかれてゐる。この邊は、釋祥邁にも、また現八十一化圖説の編者にも混亂と困惑とがあつた由を示めしてゐるのである——わかれてゐる。また、第三十化は現八十一化圖説の第三十、第三十一、および第三十四化の三カ條に⁽³⁵⁾、第三十四化は現八十一化圖説の第三十四、第四十三、および第四十五の三カ條に、第四十二化は現八十一化圖説の第三十三、第三十五、第四十二の實に九カ條に、それぞれわけられて記されてゐるのである。これらの場合、當然のことながら、大體現八十一化圖説の文が原八十一化圖のそれに比して長文である。しかも、資料という面から兩者の關係を眺めると、單に原八十一化圖の文を、そのまま現八十一化圖説の文とした場合だけではないのである。この點は、原八十一化圖と現八十一化圖説との關係を考えるにあたつて、とくに注意しなければならぬことのように考えられるので、つぎにそのことにふれることにしよう。

原八十一化圖の第十一化は、大雜把にいはば猶龍傳と道德眞經廣聖義の文をあわせた上で、省畧したものといつて、大過ないであろう。これに對して、現八十一化圖説の第十一化は猶龍傳と道德眞經廣聖義、第十二化は、どちらかといへば道德眞經廣聖義によつた傾向がつよい。「天漢元年」なる語は、猶龍傳や混元聖紀にはなく、道德眞經廣聖義のみにみえてゐるためである。第十三化は道德眞經廣聖義と太上混元老子史畧によつた感がつよい。「濟陰」の一句は、太上混元老子史畧にしかみえてゐない。第十五化は混元聖紀か太上混元老子史畧が主な資料であつたであろうし、第十九化も、おそらく同様だつたのではなからうか。これらの場合、果して原八十一化圖の文がどの程度現八十一化圖説のそれに影響を與えていたかどうか、私にははなはだしく疑問に思われる。というのは、老子が代々生れ代つて

帝師となったという説話は、古くから廣く人口に膾炙していたためである。

原八十一化圖の第三十化は、おそらく混元聖紀がその資料であったであろうが、現八十一化圖説の第三十・第三十一の兩化も同様であったであろう。ただし、第三十四化は、その上に、原八十一化圖の第三十四化の冒頭の部分をも合様しているように思われる。原八十一化圖の第三十四化の第一項と第三項とは、おそらく混元聖紀が主な資料であろう。第二項は、わからない。第三項の後半も同様によくわからないけれども、混元聖紀卷五には

入雪山棲止阿藍花樹下。修尹真人昔所授之道。(註畧) 備歷艱苦六年。道成身相金色。類佛陀像。號曰釋迦牟尼。

至匡王四年壬子二月十五日解化。(中畧) 釋迦寂滅之後。上生三十二天。昇寶奕天。居延眞宮。爲種民天之長。號善惠眞人。

という一段があるから、あるいはこの一段が資料とされているのかもしれない。これに對して、原八十一化圖の第二項に相當する現八十一化圖説の第四十三化は、撰者がおそらく適當な資料が見當らないまま、原八十一化圖の第二項をわずかに敷衍して轉載したものにすぎないようである。現八十一化圖説の第四十五化に相當する同意の文は混元聖紀にみえるとはいえ、同文ではないから、他の何らかの資料を加味したと思われるけれども、いまの私には見當がつかない。あるいは、釋迦の傳記からとったのかもしれない。

原八十一化圖の第四十二化は、さきにふれたように、現八十一化圖説の第三十三化以下の九ヶ條にわかれるが、そのうちで第三十三化と第三十七化とはほぼ混元聖紀、第三十八化も大半は混元聖紀が資料とされているらしい。これに對して第四十化は猶龍傳と原八十一化圖から構成されたようである。その他の化條の資料は、いまのところ不明としておく以外に方法がない。酷似する文章がみいだされないためである。

とにかく、以上のような諸點を綜合して考えてみると、必ずしも福井博士の説くように、福井本をはじめとする現八十一化圖説を原八十一化圖の單なる抄本とみるわけにはいかないのである。従つて、はなはだ失禮ないい方ではあるが、福井博士の説は、以上の検討の結果から推して、表面的な見解といわざるをえないのである。

さらにいまひとつ、つけ加えておきたいことがある。それは福井博士が、現八十一化圖説が原八十一化圖の抄本であることに關連し、現存本に第六十四・第七十六・第七十九・第八十・第八十一の各化が入っている關係上、當然原八十一化圖にもこれらの各化が入っていたにちがいないと説く點である。八十一化圖であるから、八十一葉の圖があつたことは事實であらう。けれども至元辯僞錄には、わずか約四分の一の二十一カ條か二十二カ條しか引用されていない。だから、残りの約六十條に對する圖もあつたろうといふのであるならば、話はわかる。また、検討を加えて、欠けていることの判明した化條や圖が入っていたであらうといふのであるならば、これはまた納得できる。それにもかかわらず、何らの説明もなく、また根據も示さずに、突然第六十四化以下の五カ條も入っていたらうといふだけでは、讀者に對して説得力に欠け、納得させることは不可能であらう。一體、この老子八十一化圖なるものの作製目的は、至元辯僞錄によれば、老子の化現轉生や化胡の種々相を説くところにおかれていたようである。とすれば、轉生の説明が比較的くわしいのに對して化胡の種々相はいささか簡畧に扱われている感がある。この點が、もつと十分に說かれるべきであらう。そうして、福井博士のいわゆる第六十四化以下などは、いわばなくもがなの部分ではなからうか。もちろん私は、これらの圖や説明が全然なかつたと否定してゐるのではない。ただ、當然入っていたといふように考えられる福井博士の考え方の根據に疑問をいだくだけである。できれば、同博士から私の納得のいく懇切な御示教がえられれば幸いである。

四 吉岡説について

吉岡博士は、さきにもふれたように、現八十一化圖説卷首にある明の太祖の序と陳致虚の序とを根據に、陳致虚修治本なるものの存在を思いつき、卷頭の真人圖をその重要な論據とした。そうして、現行本すなわち、現八十一化圖説は「實は元の佛道紛争の發端となった問題の書物のほぼ全貌を伝えるものとして貴重な資料であり、それは至元辯偽録が口を極めて攻撃している、その太上八十一化圖である、ということになる」といい、現八十一化圖説即原八十一化圖なる見方をとっているのである。現八十一化圖説が、元代佛道論争の發端となった原八十一化圖の「全貌」ではなくて、「片鱗」を伝える資料だというのであるならば、私もまったく同感であり、吉岡博士と同じく本書を貴重な資料と考える。しかしながら、現八十一化圖説即原八十一化圖と主張するにいたっては、その主張の論據を疑わざるをえない。一々各化條について、くわしく比較検討を加えたとは思えないからである。私は前節において、福井博士の行なった比較對照に對して、再對照を試みた。その結果、失禮かつ残念ではあるが、福井博士の抄本説に對して、反對の考えをもたざるをえなくなった。兩書の資料のあいだに相違が見いだされたためである。吉岡説のこの點については、のちにややくわしく私見をのべるが、まずさきの對照表によっても明らかのように、現八十一化圖説が、原八十一化圖の「全貌」を傳えたものでないことだけは、素人にもわかるのではないかということを指摘しておきたい。半數以上の化條が欠けているのかかわらず、それでも「全貌」を傳えるというのであるならば、私は「全貌」という語の定義がわからなくなる。完全な原本が残っていて、それと比較してそのようにいうのであるならば、納得できる。しかし、完本が現存しないのに、どうして「全貌」を傳えるといえるのであろうか。學術論文は、小説や感想文

とは本質的に異なり、用語の點においても、十分に嚴密でなければならぬであらう。しかも吉岡博士は、私の論稿を批評する際に對して、「これだけの説明では納得がいかない」という表現をしばしば使用される。ここで私は、そっくりそのまま、その表現を吉岡博士にお返ししたい。同様の感じは、本稿ではしばしばいだかせられたが、原八十一化圖が焚毀されたのにかかわらず残っていてふしぎでないのは、猶龍傳が残っていることに照して首肯されるだらうという一段も、その一例である。

現八十一化圖説が原八十一化圖の「全貌」を伝える、いいかえれば、兩者が同一のものと説く吉岡博士にしても、對照表をつくって兩者を比較したために、そのあいだに相違のあることだけに氣づかれた。そうして、兩者のあいだに「必ずしも一致していないところがあるのは、どう解釋すべきか」という自問を發し、それに對して、至元辯偽錄撰述の目的、八十一化圖を論難する論理が前代の復習であること、引用の杜撰、および八十一化圖の主な參考資料が猶龍傳であることの四つをあげて、自答している。しかし、私からいわせれば、これらはすべてその問いに對する答えとはなっていない。その上、それらの答え自體に妥當でない點があるように思われる。つぎにそれらの點について、ふれてみよう。

吉岡博士は、至元辯偽錄撰述の目的に對して、つぎのようにいう。

至元辯偽錄撰述の意圖は、太上八十一化圖の偽妄を學問的に冷靜に批判しようとしたものではない。八十一化圖説を代表的なものとして俎上にのせて、後は當時の全眞道士たちの出たらめな佛教觀、即ち化胡思想を妄信した考え方を非難することによって、輿論を盛り上げ、爲政者の惡感情を觸發する、政治的なかけ引きを企圖したものである。⁽³⁶⁾といえる。

冷静か否かはとにかく、化胡説は佛教側にとつては大問題であるから、宗教的にも佛教學的にも、大いに批判、反論しようとするのは、當然である。その際、八十一化圖を「代表的」なものとして俎上にのせるのではなくて、八十一化圖そのものが、このときには大問題であつたと思う。それは、至元辯僞錄卷三に收められている雪庭福裕と李志常との對論によつても、福裕の上奏文によつても、明らかである。⁽³⁷⁾ つぎに注意すべきことは、化胡思想を妄信したのは、なにも全眞道士だけではない。従つて、全眞道士の考え方を非難することは、それだけに止まらず、むしろそのような考え方を容認した佛教者をも非難することになる。さらに、そんなことをして、果して「輿論」がもりあがり、ひいては「爲政者の惡感情が觸發される」だらうか。そもそも、佛道論争などは「輿論」——もっとも、この場合「輿論」の定義が問題だが、私は常識的に「天下の多くの人々の議論」ととる——とはまったく無關係である。そんなことで爲政者が惡感情をもつと考えるのは、考えちがいはないではないかと思われる。もちろん、吉岡博士としては、おそらく、全眞道士が自己本位の勝手な主張、誤った考えをしているのを改めさせようとした、佛教側の考え方だといふいみを表現しようとしたのだらうと思われるが、もしそうだとすれば、そのように表現を改められるべきではないだらうか。讀者に誤解を與えるおそれが多分にある。

第二に吉岡博士は、「論難の論理」が、

二教論や笑道論以來の佛教徒によつて繰り返された論法のほとんどそのままの復習であつて、そこに祥邁の獨自の見解らしきものは、ほとんど見られない。

ことで、政治的かけ引きの意図が明白だとし、問題にすべき化胡思想的圖説には案外「ほほかむりをして」おき、どつちでもよいような、いい古るされた問題がむし返えされているという。

二教論や笑道論以來くりかえされた論法は、同様な問題が提出されれば、くりかえし用いられるのが當然である。

吉岡博士は、「二教論以來くりかえされた論法」というが、本當にそうであらうか。その點については、本題からややかけ離れるのでふかくは立入らないが、二教論や笑道論の條項と、原八十一化圖の化條とを比べてみるとすぐわかるように、かなりひらきがある。その上、佛道論争が古くから爲政者の外護獲得争いという性格をもつものである以上、前代の議論のむしかえしや論法の復習などが行なわれるのは當然であらう。さらに、化胡思想が問題にされないとするれば、吉岡博士の八十一化圖を代表的なものとして俎上にのせると矛盾するが、この矛盾に對してどう考えておられるのか、御示教を願いたい。なお、吉岡博士は、「論法」と「見解」とを同意語のようにして使用しているのはいかがであらうか。

第三に、原文の引用の仕方が杜撰だとし、その一例として、原八十一化圖の第四十二化が、現八十一化圖説の第三十一化から第四十二化にわたる點を指摘し、一事件を一繪圖で表現する圖説のあり方としては、引用の仕方が正しいとは思われないという。

この點は、まさにそのとおりである。一々の例については、前節で若干ふれたからここではくりかえさないが、引用が杜撰なことは事實である。ただし、それは至元辯僞錄の話であつて、果して原八十一化圖の編集が杜撰であつたかどうかは、原本が存在していない今日、判斷することはできない。また、現存の至元辯僞錄が、元代當時の至元辯僞錄そのままであるか否かもさだかではない。一應検討してみる必要があるであらう。さらに、中國の書の通弊として、引用文が原文そのままのことは、めつたにない。その點は、今日においても同様である。適當に省畧するか、都合のよい部分のみを引用する場合が多く——もっとも、日本でもありがちであるが——閉口することが少なくない。

まして、佛教側が教敵ともいふべき道教側の、しかも目の敵にしている文獻資料を引用するのであるから、杜撰になるのは當然であろう。それを、杜撰だと攻撃するのは、いささか常識はずれではなからうか。おそらく、多少の曲筆的引用のあるであろうことも認めないわけにはいかないのではなからうか。従つて、至元辯僞錄の引用文がすべて原八十一化圖に忠實というわけにはいかないであろう。とはいふものの、原本にない文章を原文と偽つてのせることは、よもやしないであろうから、引用文はさほど原八十一化圖から離れたものとみる必要はないであろう。

なお、一事件を一繪圖で表現するのは、圖説として當然で、これまた吉岡博士のいうとおりである。けれども、その原則に反する表現が、至元辯僞錄所引の場合においてではなく、現八十一化圖説において行なわれていた場合には、吉岡博士はこれをいかに説明するのであらうか。たとえば、現八十一化圖説の第十七化、第十九化、第四十五化などはその例である。「原八十一化圖を、そのまま襲つた」では、説明になるまい。

さらに第四に、吉岡博士は、猶龍傳が主な參考資料だという。同博士は、文中において、あるときには「八十一化圖」、ある場合には「八十一化圖説」と記していて、そのあいだに區別がなく、混用されている。従つて、現八十一化圖説の資料をさすものなのか、原八十一化圖のそれなのか、讀者は判斷に苦しめられる。あるいは誤っているかもしれないが、私の感じでは、原八十一化圖を指しているように思われるので、ここではそのいみにとつておく。萬一、誤りであることが吉岡博士からの通報によつて明らかになった場合には、訂正する。

吉岡博士は、「辯僞錄の引用文は八十一化圖説よりも、むしろ猶龍傳の文句に相當するものが多く見られる」。だから、「辯僞錄の撰者は、猶龍傳の文句によりながら、それがあたかも八十一化圖に書かれている文句であるかの如く非難することも可能なわけである」。そこで、全眞道士は種本が同書だから辯解の餘地がないのだというのである。

この點については、まず、第二節の對照表をみていただきたい。原八十一化圖の資料として猶龍傳のみが使用されていると、私がみたのは、前節で指摘した分をもふくめて、わずか四カ條にすぎない。その他の化條においては、猶龍傳のみではなく、他の資料、たとえば道徳眞經廣聖義、混元聖紀、太上混元眞錄などをあわせて資料として使用されているのである。従つて、私は原八十一化圖の主たる資料が猶龍傳だとは思わない。くわしくは對照表にゆずつて、一々具體的な化條名を指摘するのははぶくが、たとえば第一化は、吉岡博士は猶龍傳を主資料と認めている。けれども、私からいわせれば、雲笈七籤、道徳眞經廣聖義も使用されていて、猶龍傳だけに限っているわけではない。あえて化條名は秘すが、なぜ猶龍傳を主な參考資料とのべたのか私にはまったくわからないようなものもある。それらのくわしいことについては、お手数ながら、第二節の對照表によつて承知していただきたい。その上、現八十一化圖説にない原八十一化圖の化條の存在は、一體どう考えるべきであらうか。それでも、現行本は、「元の佛道紛争の發端となつた問題の書物のほゞ全貌を傳えるもの」と考えなければならぬのであらうか。吉岡博士のお教えをうけたいところである。單に、「引用の杜撰」や、現八十一化圖説の「いくらかの錯亂」だけで片付く問題ではあるまい。

吉岡博士は、猶龍傳が主な資料だから、猶龍傳の文句によりながら、それが八十一化圖の文句であるかのように非難されても、辯解の餘地はないという。たしかに、一面そういうことはあるであらう。たとえば、私がこっそりと吉岡博士の説をぬすんで、あたかも自分の説のような顔をして發表した場合には、吉岡博士の説によりながら私が攻撃されても文句のいいようはないであらう。けれども、猶龍傳はすでに論争の一三〇年以上前に、出刊された書物であつて、佛教側にもその名は知られていた。しかも、それを、こっそり盗んで原八十一化圖に入れたものでもなかった。従つて、吉岡博士の説は、なんの實證性もない單なる獨斷的臆測にすぎず、この際一顧の價值もない頭のなかで

考えた遊びにすぎず、歴史的事實とは何のかわりもないことである。

以上、四つの理由をあげたのち、吉岡博士は、

そんなわけで、辯偽録の引用文と、現行本八十一化圖説の文句とが一致しないからとて、それだけで現行本を云々することができないことを注意しておきたい。

と結んでいるのである。いいかえれば、これが、現八十一化圖説と原八十一化圖との文が一致しないことに對する吉岡博士の自答なのである。古くからの道教研究の友人として、あるいは日本道教學會創設者の同志のひとりとして、道教研究に従事している吉岡博士の解答として、これをみた場合、私はあまりにもさびしい。これでは、まったく解答になっていないと思われるからである。友人として私は、いまし、讀者を納得させる答えをだしてほしかった。これでは、解答になっていないどころか、にげているとしか思えないためである。そこで、吉岡博士に代って私が解答めいたものをだしておこう。

原八十一化圖の資料となつたものは、猶龍傳もそのひとつであるが、猶龍傳だけではなかつたであらう。現存の至元辯偽録によるかぎり、原八十一化圖の資料としては、雲笈七籤、道德眞經廣聖義、混元聖紀、太上混元眞錄、太霄隱書、太上混元老子史畧などさまざまな資料、福井博士の言をかりていえば、猶龍傳をふくめたさまざまな關係書が資料とされたのであらう。これに對して、現八十一化圖説すなわち現行本は、原八十一化圖およびそこに使用された關係書のほかになお、歷世眞仙體道通鑑、歷世眞仙體道通鑑後集、仙苑編珠、太上老君年譜要畧、玄品錄、列仙全傳、拾遺記、仙傳拾遺など、かなり多くの關係資料を使用したのであらう。いいかえれば、私は、吉岡博士が原八十一化圖即現八十一化圖説とみるのに對して、後者はのちに——おそらく明代であらうが——あらたに編集されたのである

うと考えるのである。吉岡博士の説にいくたの矛盾がみられるのは、兩者を同一書とみるところに根本の原因があると考ええる。

四　　む　　す　　び

以上、至元辯僞錄に引かれている、全眞教の道士が元代につくったといわれている老子八十一化圖と、現存の老子八十一化圖説との關係について、その参考にした資料、いわば出典の問題を中心にして考えてみた。そうして、私のみたせまい範圍内のことではありながら、目にふれた關係書によって兩者の資料の對照表をつくって比較し、それにもとづいて、福井康順・吉岡義豐兩博士の説について、私なりに考えてみた。その結果、現行本は、福井博士の説くように、至元辯僞錄所引の老子八十一化圖の單なる抄本でもなければ、吉岡博士の説くように、老子八十一化圖のほぼ全貌を伝える問題の書そのものでもないという結論に到達した。私としては、いまのところ、現行本老子八十一化圖説は、元代の老子八十一化圖と無關係ではないが、おそらく明代のいつのころかに、關係の多くの書物をあつめ、老子八十一化圖の一カ條にまとめられているものを數カ條に分散させたり、原本の殘簡やその他の道經をも摺拾した關係記事を、八十一條に無理に按配してつくりあげたものであらうと考えている。ただし、まだ十分關係書に目を通していいないので、本稿には見落しや曲解、我田引水的な考えもあるであらう。いわば中間報告的なものであるために、各方面からの御教示がえられれば幸いである。

(昭和四六・二・二〇稿)

〔附記〕 本稿は、本研究の中國宗教班の「中國における佛教と道教」と題する班研究のうち、私の「元代の三教

關係」と題する分坦課題の成果の一部である。なお、道教研究の大家として自他ともに許す吉岡義豊博士に對して、親しさのあまり、非禮にわたる言辭のあったことをふかくお詫びする。

1 至元辯僞錄卷三には、論争に参加した僧侶は三百餘名、道士は二百餘名で、「證義」として陪席した儒家の数も二百餘名であったと記されている。この記述が萬一事實であつたとするならば、中國における佛道論争史上、最大の規模であつたとしなければならぬまい。けれども、果して當時あらたに建立された上都の宮殿が、總計七百名以上の人々をいれることができるほどの廣さがあつたとは考えられない上に、こんな大人數では論争ができるとは思われない。さらに、至元辯僞錄卷四の末尾に附載されたところによれば、論争にやぶれた結果、剃髮した道士の数も、對論した僧侶の人數もともに一七名であつた由である。従つて、右の總計七百餘名にのぼるとするのは、どうも事實とは考えられない。そこで本文では、「かなり規模の大きな」という表現にしたのである。

2 至元辯僞錄は全五卷。大正新修大藏經卷五二、大日本校訂大藏經護教部露一など所收。本稿では、主として後者を使用した。

3 これらの點のやくわしいこと、および從來の研究者の本書に對する態度については、拙稿「元代佛道論争研究序說」(結城教授頌壽記念佛教思想史論集所收)参照。

4 同書卷四には、分註で己未すなわち憲宗の九年九月七日に中都の憫忠寺の前に臺を築いて、在城の僧道・官僚・士庶を集め、その面前で道藏經の傳記や刊行の印板などを焼いたと記されている。けれども、本文にはそのようなことは一言もみえず、前年の七月十一日に焼却したように記されている。分註は、撰者自身が施こすはずはない。この點も、至元辯僞錄に後人の手の加わっている由を物語る一例となるであらう。それはとにかく、あるいは分註の文の方が事實に近いのかもしれない。とはいえず、「中都憫忠寺」なる表現は不審である。中都すなわち現在の北京は、金代には中都と稱した。Chinggis Khan は、金の中都を陥れて、燕京と改稱し、世祖の中統五年(一二三四)に再び中都と改稱したと、新元史卷四六地理志の大都略の條にみえている。これに従えば、憲宗の九年には「燕京憫忠寺」でなければならず、この點に關するかぎりでは、本文の方が正確である。従つて、

分註の記載も全面的に信用することはできない。本稿の本文で至元辯偽錄の本文の記載に従ったのは、そのためである。ただし私が、至元辯偽錄の本文の記載をあまり信用していないことは、もちろんである。

5 以上が、本紀要の第四六冊に發表した「老子八十一化圖説について——陳致虛本の存在をめぐって——」と題する拙稿の要約である。くわしくは同稿によって承知していただきたい。

6 福井博士の對照表については、同博士「道教の基礎的研究」三一四―七頁を、吉岡博士のそれについては、同博士「道教と佛敎第二」一九八―二四六頁參照。

7 猶龍傳は道藏第五五冊所收。

8 雲笈七籤卷一〇二は道藏第六九八冊所收。

9 道德眞經廣聖義卷二は道藏第四四〇冊所收。

10 なお、ここに記されている天の名稱は、鬱單天から無想無愛天にいたる九天を除けば、靈寶領敎濟度金書卷二三六（道藏第二四一冊）、太上說玄天大聖眞武本傳神呪妙經（道藏第五三一冊）、太上洞神太元河圖三元仰謝儀（道藏第五六五冊）、雲笈七籤卷二一（道藏第六八二冊）などにみえている三十六天の名稱の畧稱で、たとえば色界第七の靈明は虛明、第十五の太黃は太皇、無色界第一の霄慶は霄度などのように、二、三の誤寫はあるけれども、誤りや相違はない。忠實に寫しているといふことができる。また、畧稱という點では太上洞玄靈寶天關經（道藏第六一八冊）と同様だが、畧稱のやり方は兩者でかなり相違がある。

11 混元聖紀卷二は道藏第五五一冊所收。

12 太上混元老子史畧は道藏第五五四冊所收。

13 歷世眞仙體道通鑑後集は道藏第一五〇冊所收。

14 このつぎ以下に辯偽錄所引の八十一化圖の文と同様に神農、黃帝のときになった帝師について記されているが、それぞれの項においてかかげることにする。

15 太上混元老子史畧卷中所收文は、混元聖紀とほぼ同文なので、はぶく。以下も大體同様なので、必要な場合を除いて省畧する。

16 太上混元眞録は道藏第六〇四冊所收。なお、辯偽録や太上混元眞録などの末尾に記されている「圖三五。寸一分。云云」とい
う歌は、混元聖紀卷三、太上混元老子史畧卷下などに、文字に多少の相違はありながら收められているのに對して、猶龍傳には
まったくみえていない。不審である。この歌は、初句から「輔翼人」までは、たとえば長二尺は長尺二、腹三齊は腹齊三、内二
百は二百六などのように、多少文字に出入はあるが、鼎器歌とよばれる金丹道で重要視されたものであるらしく、上陽子金丹大
要妙用卷五（道藏第七三六冊）には參同契鼎器歌としてかけられ、周易參同契鼎器歌明鏡圖（道藏第六二四冊）なる一書もつ
くられている。それらをすべてここにかかげるのは、煩わしくもあり、引用がながくもなるので、すべてはふいた。

17 仙苑編珠卷下は道藏第三三〇冊所收。

18 太上老君年譜要畧は道藏第五五四冊所收。

19 歷世眞仙體道通鑑卷九は道藏第一四〇冊所收。なお、宋倫のことについては、斷片的ながら、仙苑編珠卷上の宋倫遊空の條、
および同書卷下の宋倫六甲の條にもみえているが、原文の紹介ははぶく。

20 混元聖紀卷六にも猶龍傳とほぼ同文が收められているが、重複のきらいがあるので、原文の紹介ははぶく。

21 混元聖紀卷六所收の文も、二、三の文字の相違を除けば、同文である。また、冲虛至德眞經すなわち列子（道藏第三四八冊所
收）巻中の仲尼第四の文は、末尾の「所謂聖者老聃也」なる一句を除けば、やはり酷似しているので、原文をかかげることは、
はぶく。

22 玄品録卷一は道藏第五五八冊所收。

23 混元聖紀卷七にも同意の文が收められているが、文章としては猶龍傳が八十一化圖說に近いので、混元聖紀の紹介は省畧する。
24 吉岡博士は猶龍傳卷五の度漢天師の條をひくが、内容は現存本八十一化圖說とまったく異なり、参考資料とよぶに足りない。

また、混元聖紀卷七や漢天師世家卷二（道藏第一〇六六冊）の初代天師の條には、その傳があるけれども、ここにみえているよ
うな記述はない。もっとも近いのは列仙全傳なので、本文にはそれをかかげた。

25 歷世眞仙體道通鑑卷二八は道藏第一四四冊所收。

26 現存本八十一化圖説には神仙傳を引いて説明しているが、現行の神仙傳や列仙全傳には王若冲の傳はみえない。猶龍傳や混元聖紀、もしくは歷世眞仙體道通鑑などにも記されていない。いまはやむなく、出典不明としておく。御教示がえられれば幸いである。

27 混元聖紀卷七には寇謙之關係の記述は收められているけれども、その文の内容はかなり相違しているので、原文の紹介ははぶく。

28 なお、この話は大變有名であつたとみえて、道教靈驗記卷四（道藏第三二五冊所收）に「木文天尊驗」と題して、くわしくのべられている。

29 混元聖紀卷八では開元二九年が天寶元年となつてゐる以外はほとんど同文なので、原文の紹介ははぶく。

30 いままでのところ、この原典は見いだせない。博雅の御示教がえられれば幸いである。

31 吉岡博士は、註6にかかげた著書の二四六頁において、第八十一化に對應する資料として太上老君年譜要畧の一節をあげているが、一讀してまったく内容を異にすることが明白なので、ここではあえてはぶいた。

32 註6同書第三章、三〇七頁以下參照。

33 註6同書第三章、二九七頁參照。混元聖紀卷八にみえる劉如璿以下八名の人々の議論は、同書二九八～九頁にかかげてある。二字誤植があるが（二九八頁一行目、迹↓跡、他↓化）、ついで參照されたい。

34 古樓觀紫雲衍慶集、および終南山說經臺歷代眞仙碑記は、ともに道藏第六〇五冊所收。

35 現八十一化圖説の第三十四化は、ひよっとすると、原八十一化圖の第三十化の後半と第三十四化の冒頭とをあわせ、さらに混元聖紀の文をも加えたのかもしれない。

36 吉岡博士註6同書一八九頁。

37 拙稿「元代佛道論爭研究序説」（結城教授頌壽記念佛教思想史論集所收）參照。